

比企谷八幡とトリニ
ティセブン

Oceans

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「俺ガイル」と「トリニティセブン」

のクロスオーバーです。

アラタ↓八幡、聖↓小町でやっていくので

アラタと聖は出ません。

基本原作通りの展開で話を進めますが、多少原作改変するかもしれません。時系列は修学旅行が終わったあとあたり

ビブリア学園編入時は高2の4月から生活する予定

アンチヘイトは01話だけです。

他の作品も書いているので不定期更新になります。
台本形式をやめました。

目次

設定集

第00話 設定 1

本編

第01話 奉仕部との決別とビブリア

学園編入 13

第02話 超秘密組織王立ビブリア

学園の内情 41

第03話 忍者の女の子とお風呂の

女の子 45

第04話 夜の特別授業と空間閉鎖

53

第05話 王立図書館検閲官トップ

とサード 63

第06話 夢の中の少女 76

第07話 夏だ！海だ！水着だ！バ

イトだ！ 87

第08話 露天風呂と錬金術師

97

第09話 新たな崩壊現象 111

第10話 魔術起動と一撃必殺技

134

第11話 体育授業と夢世界

149

第12話 永劫図書館とクライマー

162

第13話 リーゼロツテシヤル

ロツク | 172

第14話 バトルのゆくえ | 178

設定集

第00話 設定

〈 俺ガイル サイド 〉

・比企谷八幡（本作の主人公）

学校 総武高校↓王立ビブリア学園

学年 2年

年齢 17歳

両親は不慮の事故でいない。

親の貯金等で暮らしている

書庫 傲慢（スペルビア）

テーマ 支配（インペル）

魔道書は「アステイルの写本」と

のちに「イーリアス断章」を持つ

自分が引き起こした崩壊現象で

妹の小町が消えてしまった。(本当の妹ではない)

助けられると分かり、魔道士になって本当の妹ではないと知っても一緒に暮らしていた小町を助けたいと思いビブリア学園に編入を決意

・比企谷小町

学校 総武高校↓王立リベル学園

学年 1年

年齢 15歳

福音探求会のメンバーの1人。

書庫 憤怒(イラ)

テーマ 崩壊(ルイーナ) 創造(パルタム)

分解(アナリシス)

「アステイルの写本」と「イーリアス断章」の所持者でもある。

両親が病気で他界したため、八幡の妹という

名目で彼の家で生活していた。

八幡には記憶操作で自分の妹として認識させていた。

崩壊現象で無の世界に飛ばされる前、八幡に伝説の魔道書「アスティルの写本」を手渡した。あと八幡が奉仕部のことで悩んでいたことに気づいてあげられなかったことに後悔している。

学年は八幡の一個下になっています。

他の俺ガイルキャラは原作通り（最初しか出ない）

↳ トリニティセブンサイド ↳

・浅見リリス

学校 王立ビブリア学園

八幡のクラスの担任

年齢 17歳

書庫 色欲（ルクスリア）

テーマ 生命（アビエス）

所持している魔道書は「ヘルメス外典」

八幡と同じ年ながら教授職に就く

スタイルは抜群で容姿端麗な女の子

巨乳で赤毛のロングヘアに右片方のみをお下げのヘアスタイルで、ベレー帽を着用している

専門術式は錬金術（アウター・アルケミック）

戦闘時は、錬金術によって自身の魔道書を

さまざまな銃に変化させて戦う戦闘スタイルを持ち

援護射撃に回ることが多い

八幡とは今はまだ教師と生徒の関係

・神無月アリン

学校 王立ビブリア学園

学年 2年

年齢 16歳

書庫 憤怒（イラ）

テーマ 崩壊（ルイーナ）

専門術式は聖儀術（カオシック・ルーン）

所持している魔道書は『黄昏の真説（ラグナ・ユグドラシル）』

所持している武装は「魔槍ゲイボルグ」

八幡との出会いは男子の大浴場

容姿が小町に似ている女の子

魔王候補の八幡をだんな様と呼んでいる

八幡のことに興味がある（学園長の影響で）

・風間レヴィ

学校 王立ビブリア学園

学年 2年

年齢 17歳

書庫 嫉妬（インウイディア）

テーマ 期待（エクスペクト）

専門術式は忍法術（シャーマニック・スペル）

秘奥義は混沌渦界（リヴァイア・サン）

殺人術から房中術に至るまでさまざまな術を使う

忍者の女の子

その実力は世界トップクラスで

戦闘能力に限定すれば5本の指に入るほどである
手裏剣をかたどった髪留めでポニーテールの
ヘアスタイルで、左目部分は髪で隠れている
単独行動を主とする忍者なので、誰かに期待することはない
八幡との仲はいいほう。

・山奈ミラ

学校 王立ビブリア学園

学年 2年

年齢 16歳

書庫 傲慢（スペルビア）

テーマ 正義（ユースティティア）

王立図書館検閲官首席である

あらゆる魔力を反射させる

水晶「鏡の国の書」を所持

専門術式は映晶術（ゲヘナ・スコープ）

先輩の不動アキオといつも一緒にいる

八幡のことは最初、不浄な男と

言って敵対視していた

主に目が原因。しかし共に過ごしていくうちに

関係は改善へと向かう

・不動アキオ

学校 王立ビブリア学園

学年 3年

年齢 18歳

書庫 暴食（グラ）

テーマ 信仰（フィデス）

王立図書館検閲官第3席

専門術式は真言術（マントラ・エンチャント）

制服はワイシャツと丈の長いスカートを

着こなしている

大雑把で豪快な性格で、足蹴りが得意

床や壁を破壊する威力を持つ

後輩のミラと行動を共にしている
八幡のことは敵対視していない

・倉田ユイ

学校 王立ビブリア学園

学年 2年

年齢 14歳

書庫 強欲（アワリテイア）

テーマ 友情（アミキテイア）

所持している魔道書は「アレイストの魔譜」

専門術式は重唱術（アーク・シンフォニー）

長い間、夢の世界で過ごしていた魔道士の女の子

学園長に次ぐほどの魔力を持っている

そのため、それを抑えるために

地下迷宮で眠っていた

現実世界と夢世界とで容姿が異なる

八幡とは最初、夢世界で出会う

のちに八幡達に助けてもらった
その後、ビブリア学園に通い
八幡のことをお兄ちゃんと呼び、甘えている
八幡もそれを受け入れている

・リーゼロッツテリシヤルロツク

学校 王立ビブリア学園（休学のちに復学）

学年 2年

年齢 17歳

書庫 怠惰（アケディア）

テーマ 停滞（スタグナ）

専門術式は数秘術（ロゴス・アート）

秘奥義は時空裂界（バアル・ペオル）

セリナの双子の姉で、元王立図書館検閲官次席の

女の子

元福音探求会のメンバー

服装は露出の多いコスチュームを着用

自分から魔王候補になりトリニティセブンの魔力を奪おうとしたが八幡達に阻まれた

その後、八幡達の助けにより

ビブリア学園に復学した。

八幡には感謝している

・セリナⅡシャルロック

学校 王立ビブリア学園

学年 2年

年齢 17歳

書庫 怠惰（アケディア）

テーマ 束縛（リガール）

所持している魔法書は「アルキタスの複写本」

専門術式は姉と同じ数秘術

リーゼロッテの双子の妹。

カチューシャの代わりに眼鏡を付けている。

髪型はツインテール。新聞部に所属しており

カメラを片手にスクープを求めて
取材活動をしている

八幡のことは魔王候補なだけあって興味がある

・学園長（名前は誰にも明かしていない）

学校 王立ビブリア学園 学園長

年齢 30歳くらい

書庫 憤怒（イラ）

テーマ 調和（コンコルディア）

長身で、後ろにまとめた銀色の長髪に銀縁メガネをしている

所持している魔道書は「王の門（ソロモンズ・ゲート）」

一定量以上の魔力が無いと見ることができず、

高位の魔道士でも長く見すぎると

発狂するほどの魔道書

黒いスーツに襟元を大きく開けたYシャツを着用

魔力は世界トップクラス

魔道を極める「大魔公（パラディン）」の1人

世界で5番以内に入る強さを兼ね備えているが、変態な学園長である。

八幡とは少しながら話す機会がある。

本編

第01話 奉仕部との決別とビブリア学園編入

修学旅行明けの翌日の朝、俺は学校にはあまり行きたくない気分だった。なぜなら修学旅行前の奉仕部の依頼にあった。

〈 回想 〉

それは修学旅行前の話

部室で本を読んでる時だった。葉山と同じグループ内の戸部が部室に来て依頼を持ってきた。内容は同じグループ内の海老名という人に修学旅行中に告白がしたいので協力してほしいとのことだった。俺はあまり恋愛関係の話には関わりたくなかった。同じ部員の由比ヶ浜がノリで引き受けようとした。部長の雪ノ下も由比ヶ浜から手伝ってあげようよとせがまれ俺に意見を求めてきた。そして部室内にいる全員からの視線が俺に集まった。断れる雰囲気ではなかったので依頼を受けることにした。依頼主たちが部室を出た後、どうやってこの依頼を達成させるか話し合ってる時に、1人の女子がノックして部室に入ってきた。その人こそ最初の依頼主の告白相手の海老名さんだった。

とりあえずその海老名さんから話を聞くと最近、同じグループ内が変わってきた気がする。それは嫌かな、このままの関係でいたいと言った。

そして立ち上がって部屋を出ようとした時に修学旅行でも美味しいの期待してるからと俺に向かって言っ出ていった。雪ノ下と由比ヶ浜はポカンとしていたが俺にはわかつてしまった。遠回しに告白の依頼を断ってほしいと依頼してきたことを。

そして、修学旅行がやってきた。が目立った進展はなく、むしろ妨害されているような気が俺にはしていた。

2日目の夕方、河原に俺は葉山に呼び出されていた。俺としては好都合だった。聞きたいことがこいつにあったからな

「葉山、俺に何の用だ？」

「用というより君と話がしたかったんだよ」

「で、話は？と言っても、どうせ戸部の依頼

。関連の話だとは思うが。：あと、その事に関して

だが：お前のあの態度はなんなんだ？戸部の依頼に

非協力的な感じがものすごくしたんだが、その理由

も聞かせろ」

「ああ、わかった。俺は別にそんなつもりはなかったんだ。今の関係がいいんだよ。

みんなで笑って楽しく過ごす、そういう関係が続けばいいと思ってるんだ。だから俺は……」

「そんなんで壊れる関係なら、その程度の関係なんだろう」

「そうかもしれない。けど、失ったものは戻らない」

「そんな上っ面だけの関係で楽しくやろうって思うお前の方がおかしいと俺は思うけどな」

「そうかな。俺はそうは思わない。今の俺にはこの関係が全てだよ」

「いや、上っ面だな。じゃあ戸部はどうなる。あいつは真剣に考えてるんだぞ。あいつの気持ちは考えないのかよ」

「何度か戸部には諦めるようにいったんだ。姫菜が心を開くとは思えないから。でも先のこととは分からない。だから戸部には結論を急いで欲しくなかったんだ」

「勝手ないい分だな。それはお前の都合でしかないぞ」

「なら！君ならどうするんだ？」

「俺にそんなことを聞くな。どうでもいいことだ。それは置いて……だ。つまりお前は何も変えたくないんだな」

「ああ、そうだ。でも君の言う通りこれは俺のわがままで」

「葉山、俺をあまり見くびるなよ。俺は人の言うことは簡単に信じたりはしない。お前

の言う、わがままってこともな」

「比企谷。：やつぱり君には頼りたくなかったんだがな」

「だったら自分で解決しろ。まあいい、俺がどうにかしてやるよ」

「すまないが頼むよ」

そう言つて俺と葉山はお互い別方向へ歩き出した。

☆☆☆

そして戸部が海老名さんに告白する時がきた。俺は戸部が海老名さんに告白する前に一言、声をかけた。

「おい、戸部」

「ヒ、ヒキタニくん。やつぱーわ。今俺、かなりキテるわ」

「なあ、お前は海老名さんに振られたらどうすんだ？」

「それ、聞いちゃう？」

「いいから答えろ。早くしないと来るぞ」

「そりゃ、諦めらんないしょ！俺さ適当な性格じゃん？だから今まで適当に付き合ってきたけど今回は結構マジなんだわ」

八幡 「そうか。じゃあ、戸部：頑張れよ」

「やつぱりヒキタニくんはいい奴しょ！」

「そんなじゃねーよ」

俺はそう言つて、雪ノ下達がいるところへ戻つた

「ヒツキー、いいところあるじゃん」

「どういう風の吹き回しかしら？」

「そんなんじゃねーよ。このままだと戸部は振られる。だが、丸く収める方法はある」

「そう。まあ、あなたに任せるわ」

「そうだね」

そして俺達は、戸部の告白を見守つた。

「海老名さん。俺さ、その」

「うん」

「あ、あのさ」

そう戸部が言つた時、俺は走つて戸部のとなりに立ち、正面に立つ彼女にこう言つた
「ずっと前から好きでした。俺と付き合ってください」

そう、俺は嘘告白をした。2つの依頼を成立させるにはこれが最善策だと思つたら。

「ごめんなさい。今は誰とも付き合ふ気はないの。私は帰るから」

海老名さんは俺の告白を断り、走つて帰つていった。

「だつてよ。戸部」

「ヒキタニくん、そりや、ないっしょ。振られる前にわかつたからよかつたけどよー」

そう戸部が言うと、葉山がこちらに来て

「まだ時期じゃないってことだろ。今はこの関係で楽しんでおくのもいいんじゃないか」

「それなー。ゆーても、今はつて言つてたし？ ヒキタニくん、わりいけど俺、負けないから」

「そうか」

そう言つて俺は雪ノ下達のとこへ向かつた。俺は途中、葉山とすれ違いざまに「すまない」

と謝られた。謝るぐらいなら自分で何とかしろよ。

「葉山、謝るな。あれが最善策だ」

「君がそういうやり方しか、知らないんだとわかつていたのに。…すまない」

そして俺は雪ノ下達のいるところに着くと

「うまく言えないけど、あなたのやり方は嫌いだよ」

俺は雪ノ下にやり方を否定された。そして雪ノ下は1人先に戻ってしまいました。

「あのやり方はダメだよ！もつと人の気持ちを考えてよ！」

そう言つて由比ヶ浜も俺のやり方を否定して、涙目になりながら走つて戻つていった。

俺は1人取り残され考えていた。

何で俺は否定されたんだ、お前らは俺に任せただけだ。それなのに……しかもあいつらは何もしてない、そんなやつに言われたくないと思つてしまった。そうか上っ面だけの関係だったのは俺たちだった方だったのか、俺はそう思い、あの場所には決して戻らない、とそう決めた。

く回想終了く

回想が長くなったがそんなことがあり、学校には行きたくないと思いつつも、学校へ行く準備をする。下に降りると

「お兄ちゃん。朝ごはんできてるよ」

「おう、今いくわ」

そう言つて椅子に座つて

「「いただきます」

俺が飯を食つていろと

「どうしたの？何かあつた？」

「なんでだ？」

「お兄ちゃんの目がいつもより腐つてるから」

「寝起きだからだろ。気にしなくていいぞ、目が腐つてるのはいつものことだからな」

「でも何かあつたらいつでも小町を頼つてね！あ、今の小町的に超ポイント高い!!？」

「ああ、そうだな」

そう会話しながら朝食を食べる。そして、朝食を食べ終わる。小町とは一緒に学校へ行くので小町を呼ぶ。

「小町、そろそろ学校行くぞ」

「あいあいさー」

小町を後ろに乗せて俺は自転車を漕いだ。

そして学校に着く直前、前に赤い髪の女の子が立っていた。

俺は自転車で女の子とすれ違った時に

「早く目覚めなさい、比企谷八幡。…そうでなければ殺さなくてはなりません」

そう言われた。俺は振り向いて女の子がいたであろう場所を見るともう女の子はいなくなっていた。

「なあ、さつき誰かいなかったか？」

俺は不思議に思ったので小町に聞いてみた

「誰もいなかったよ。お兄ちゃんは何か見えたの？」

「いや、勘違いかもしれない。忘れてくれ」

俺はそう言った。そして学校に着いたので小町を下ろして先に行かせて俺は駐輪場に自転車を止め、教室へ向かった。俺が教室に入るとクラスの奴らがヒソヒソと話し始めていた。「あいつが告白邪魔したやつだ」「最低」「学校来んなよ」など俺への悪口を言っていた。あの件がもう噂として出回っていた。葉山は苦い表情をしていた。俺は気にせず、うつ伏せになって授業が始まるまでイヤホンをはめて音楽を聴いていた。そして授業が始まったがあのが気になって授業に集中できなかった。そして昼休みになり俺はベストプレイスに行って小町の作った弁当を食べた。

「朝のアレはなんだったんだらうな」

誰もいない場所で俺はそんなことを口にしていた。

この時まだ八幡は太陽が黒いことに気づいていなかった。

そして放課後になった。俺は小町に「帰るから駐輪場で待っていてくれ」とメールを

送ってから教室を出た。そして昇降口へ向かおうとすると

「ヒツキー。部活行かないの？」

もう関わりたくないと思っていた由比ヶ浜に声をかけられた。

「ああ、行かない。じゃあな」

そう言つて歩き出す。由比ヶ浜は何か言つてみたいだが、俺は無視した。そして駐輪場に着き小町と合流した

「小町、帰るぞ」

「え、奉仕部の方はいいの？行かなくて」

「ああ、もう行かないことにした」

「そうなんだ。家に帰ったら理由教えてね」

「ああ」

そう言つて俺と小町は家に帰った。そして家に着き

「じゃあ、お兄ちゃん。奉仕部に行かない理由教えて」

「話が長くなると思うがいいか？」

「うん！」

俺は小町に修学旅行の時に起きたことを話した。小町はそれを聞いて

「そんなことがあったんだね。お兄ちゃん、もう奉仕部行かなくていいよ。小町も雪乃

さんと結衣さんとはもう連絡取らないから」

俺が奉仕部のことを話したら、小町は怒りながらそう言った。

「そうか」

俺はそう言つて自分の部屋に戻つた。

☆☆☆

そして5日ぐらい経つた。その間、まだ俺のあの噂は流れたままだつた。奉仕部の方も行つていない。平塚先生にも強制的に行かされそうになつたがなんとか振り切つていた。正直、もうイライラが限界に達していた。でも学校には行かないと小町が心配するので準備をする。すると一枚の絵が描いてある紙が落ちていた。俺はそれを拾い見てみると小さい頃小町が描いたと思われる、俺と小町の似顔絵と大きく赤い太陽、そして「お兄ちゃん大好き」と文字も書いてあつた。その絵と文字を見て懐かしく感じ、さつきまでのイライラしてた気持ちが少しは紛れ、俺は笑つていた。そして、その紙を持つて下に降りた。

「お兄ちゃん、朝ごはん用意出来たよ。なんか嬉しそうだね！何かいいことあつたの？」
「ん？ああ、これをちよつと見ててな」

そう言つて、俺は小町にあの絵を見せた

「お兄ちゃん！恥ずかしいからそれ返して!!？」

小町は言つて俺から紙を取つた。

「もう！恥ずかしいんだからね!!？」

「悪い。おつと、もうこんな時間だ。小町、学校行くぞ」

小町 「ちよつと待つてよ！お兄ちゃん。その前に朝ごはんを食べないと」

そう言つて俺と小町は急いで飯を食べて学校に向かつた

そして昼休みになり弁当を持ってベストプレイスへ行こうとしたが

「あ、やべ弁当持つて来んの忘れた」

急いでいて弁当を持つてきていなかつたなど思っている

「八幡！小町ちゃんが呼んでるよ」

戸塚からそう声をかけられた

「わかつたすぐ行く」

俺はそう言つて後ろの扉の方まで行つた

「小町、どうした？」

「お兄ちゃん。弁当持つてくの忘れてたでしょ。だから届けに来たの。あ、今の小町的にポイント高い!!？」

「(´▽｀)でそういうこと言うのはやめてくれ」

「気をつけるね！でさ、お兄ちゃん。一緒にお昼食べない？」

「別にいいけど、どこで食べるんだ？」

「それじゃあ、屋上で食べない？」

「いいぞ、じゃあ行くか」

俺がそう言っただけで教室を出ようとしたが

「ヒツキー、私も行っていい？」

となぜか由比ヶ浜がそんなことを言い出した。

「いや、断る。お前とは別に食いたくないしな」

俺がそう言うと

「ちよ！ヒキオなんでそんなこと言うし！」

「そうだぞ、ヒキタニ君。さすがに酷くないかその言い方は」

三浦と葉山は怒りながら、そう言った。

「別にお前らには関係ないだろ。俺は本当のことを言ったただけだ。行くぞ小町」

俺はそう言って小町を連れて廊下に出た

「待っしー！」

葉山・三浦達は俺を追いかけてきた。

「小町、少し走るのがいいか？」

「うん」

そう言つて俺と小町は走つて屋上に向かつた。

すると向かい側から、今俺が会いたくないと思つてゐる雪ノ下と平塚先生がいた。

「あら、逃げ谷君。何してるのかしら、ここは走つてはいけないと思うのだけれどそれすらわからないのかしら？」

「比企谷！今日はちゃんと奉仕部に行けよ」

そう2人に言われたが

「そんなものは知らん。あと奉仕部には絶対に行かない」

俺はそう言つて屋上へ続く階段を登つた。

「待ちなさい！」

「待て！比企谷」

そう言い、雪ノ下達も俺たちを追いかけてきた。そして俺達は、何と屋上についた。

「まあとりあえず鍵も閉めたし大丈夫だろう。小町ごめんな、変なのに付き合わせちゃまって」

「ううん、別にいいよ。気にしてないから」

「そうか、ありがとな」

俺がそう言った時、5日ほど前に会つた赤い髪の女の子が俺の方を向き正面に立つて

いた。

「お兄ちゃんの知り合い？」

「いや、5日前に見ただけだ。初対面になると思う」

「それで、あなたは誰ですか？」

そして、俺は5日前に会った。赤みがかった女の子にそう聞いた。

「リリース、浅見リリースです。それよりこの黒い太陽の世界を早く消してくださいね」

彼女はそう言った

「…なんのことだ。太陽が黒いわけが…」

俺はそう言つて太陽を見る。すると

「太陽が黒い…どういふことなんだ！太陽が黒いわけがない。なあ小町、太陽は黒じやないよな？」

「何言つてるのお兄ちゃん。太陽は前から黒だよ」

「それは、嘘だ」

「嘘じゃないよ。だってこれはお兄ちゃんが望んだことなんだから」

「俺が望んだ？」

「そうだよ。別に太陽が黒くても問題はないよ、お兄ちゃん」

そう小町は言った、笑顔で。するとなぜか、どこからか『私』のことを忘れないでね。お

兄ちゃん』と言われた気がした。

「…あ」

「どうかしたのお兄ちゃん？」

「なあ、お前本当に小町か？」

俺はそう小町に聞いた。

「何を言ってるのお兄ちゃん」

「いやなんか違和感があつてな」

「そんなことないよ！」

「じゃあなんで太陽は黒って言った？」

「だってもともと太陽は黒…」

そう言いかけた時俺は被せるように

「それだよ小町。朝、小町に見せたよな？あの絵。あの絵には太陽は赤く描いてあつた。なのに、小町は黒だと言った。そう…小町は嘘をついたことになるんだよ。本当の小町なら俺には嘘をつかない。本当の小町はどこにいるんだ？そして、お前は誰なんだ？」

そう俺は言った。

「はっはっは!!？こりゃ、やられたな」

そう言って小町の偽物は笑った。そのときこの会話を聞いていた、赤い髪の女の子が

銃弾みたいなのを小町の偽物に放った。小町の偽物はそれをバリアかなんかで弾き飛ばした。俺は呆然としていた

「おいおい、いきなりだな魔道士!!?」

「やつと正体を現しましたね。クラッカー」

「リリースさんでしたっけ? その格好はなんなんですか?」

「リリースでいいですよ。それと、これは見ての通り魔道士の戦闘スタイルですが」

「え? 戦闘スタイル? よく意味がわからないんだが」

「本当にわかんないのか? 薄々気づいていると思っただがな」

「そんなわけないだろ。気付かねーよ普通」

俺が小町の偽物にそう言った途端に、校舎のドアが壊れた。

「今度はなんだ」

「見つけたわよ、逃げヶ谷君」

「ヒツキー、やつと見つけた」

「見つけたぞ比企谷! 奉仕部へ戻って来い」

「ヒキオ! やつと見つけたし!」

「ヒキタニ君!」

となんとさつき俺を追いかけてきたやつがドアを突き破り屋上まで来た。しつこい

奴らだと思ってるよ

「誰ですか！こんな時に」

リリスはそう言った。

「あん時のあいつらか、まあいい、話を戻すがいいものを見せてやるよ」

そう言つて、小町の偽物は指をパチンと鳴らした。すると辺り一面ガレキの山と化していた。俺とリリスと小町の偽物以外は

「何が起きた!?」

と驚いていた。そして呆然と立ち尽くしていた。

「な、なんだよこれは」

「5日ほど前でしようか。この地域で大規模な重力振動が観測されました。原因はわかりませんがこれを我々は『崩壊現象』と呼んでいます。わかっていることは1つ、一夜にしてこの街が飲み込まれたということです」

そうリリスに説明を受けると俺は頭に衝撃が走った。

「うっ!!?」

「どうだ? 思い出したか?」

「そうだ。俺は修学旅行のあとイライラしていてそれが爆発してこの世界があんな黒い太陽に飲み込まれてなにもかもなくなった。その時小町が何か俺に渡して『私』のことを忘

れないでね。お兄ちゃん』って言って消えて、俺は「元の世界に戻せ。小町と一緒に暮らしてたあの日常に」って言ったんだっけか」

「そうだ。その願いを叶えた。魔術を使つてな。だがなぜかその絵と、あそこにいるお前を裏切つた奴や在校生、教師達は生き残つてだがな。理由は知らないが、まあ…まだ殺すなつてことなんだろうな」

「ええ、私もさすがに驚きました。この崩壊現象を調査するために学園から派遣されたのに来てみれば何もないはずの街があつたのですから」

「はっ！それくらい朝飯前だぜ」

「やっぱり貴女は、危険な魔道書。失敗すればさらに崩壊現象が広がつたかもしれない。それに新たな世界を作ってしまう…これはおかしい。そんなのは並の魔道書では到底不可能です」

そう言つて、リリスは俺に銃口を向けた。

「選択しなさい、比企谷八幡。1つはこの作られた世界を今すぐ魔道書に解除させること。そうすれば平和に生きれるようにしてあげます。ただし魔道書はこちらで処分し比企谷小町らの記憶を消します。そしてもう1つ、魔道書を渡さないのであればここで死んでもらう。何よりこの世界を創つたのがあなたなのだから」

「なんだよそれ。生きたいなら、なにもかも忘れろつてか。戸塚とか小町も…っ！そう

だ！なありリス、小町は生きてるのか！！？」

「それは…」

俺はリリスにそう聞いたが、中々…： 答えが返ってこなかった。すると、小町の偽物が俺の問いに答える。

「生きてるぜ」

「本当か！」

「ああ、この姿はあの娘の影の投影だからな。どこかで生きてるのは確かだぜ」

「そうか。なら、俺がやることは1つだけだ」

「そう。では決断を」

「ああ、決めたよ。魔道書は渡さない」

「えっ…あなた…」

「だけど俺も死なない。第3の選択肢、俺は魔道士になることにするわ」

「それは、本気で言ってるんですか！！？」

「そうだ。魔道士つてのは魔道書を持つてるんだろ。だったら俺もなれると思つてな」

「そうかも知れませんが、そんなのは聞いたことありません。ですが確かにいいきれませんね。こんな世界を創ってしまうんですから」

「なら、俺はやる。可能性が低くても、妹の小町にまた会いたいしな」

俺がそういうと

「ああ、そうだ。小町って言ったか、あの娘は厳密にいうとお前さんの妹じゃないぜ」
小町の偽物は俺にそう告げる。小町が俺の妹じゃない？

「どういうことだ」

「あいつはお前さんに記憶操作してな、妹ということにして一緒に住んでただけだ。理由は本人に直接聞いてくれよ」

「理由は直接聞くが、それでも俺は小町を助ける。本当の妹じゃなくても俺は妹だと思ってる。あと一緒に住んでた唯一の家族だ。助けないわけにはいかないからな」

「そうか」

小町の偽物はそう答えた

「で、これからどうすればいいんだ？リリス」

俺はそうリリスに聞いた

「そうですね。あなたにはビブリア学園に来てもらいます。後は学園に着いたら説明します」

「そうか、わかった」

「じゃあそれでは…」

リリスがそう言いかけた時

「待ちなさい」

とさつきまで立ち尽くしていた雪ノ下がそう言った。他の奴らも正気に戻っていた。

「なんだよ。雪ノ下」

「まだ話は終わっていないわ」

「俺は話すことはなにもないんだが、あと俺は行くところあるから早くしてほしいんだが」

「比企谷。行かせないぞ」

「先生に決められることではありません」

「なら実力行使でいかせてもらう」

平塚先生はそう言って、俺にファーストブリッドをかまそうとするがそれは出来ず、リリスの銃弾が先生の顔を掠った、平塚先生は驚き、その場で気を失った。

「リリス、やめろ」

「ですが…」

「これは俺たちの問題だ。リリスは見てるだけにしてくれないか？俺があいつらを片付けるから」

「わかりました。あなたがそういうのなら…」

「ああ、ありがとう。リリス」

俺はそう言つて雪ノ下達の方へ視線を移した

「で、雪ノ下。話はなんだ？」

「話は修学旅行の件よ、なぜあんな事をしたのかしら。しかも私たちに相談せずにな。謝つてもらえるかしら私と由比ヶ浜さんに」

「あれが最善策だからだ。相談したとしてもお前からはいい案は出せないと思つたしな。あとなぜお前らに謝らないといけない。むしろお前らが謝れよ。なにもしてないくせに俺のやり方を否定しておいて：ほんと、お前ら自分勝手だな、反吐が出るからとつとつ、この場から失せろ。顔も見たくない」

「うっ!!？」

雪ノ下と由比ヶ浜はその場に泣きながらうずくまつた。後は葉山と三浦だけだな：

「比企谷、言い過ぎだ。もつといいやり方があつたはずだ」

「だつたらその方法を教えてくれよ。修学旅行の時に出来なかつた奴が偉そうに言うな。葉山グループの奴の告白を阻止して関係を保つた俺に感謝の気持ちとかないのか葉山。ほんと恩知らずの屑野郎だな」

俺は三浦に聞こえるように言った。

「ヒキタニ君！それは、今話すことじゃないだろ！」

「隼人。どういふことだし！あーし、知らないんだけど」

「それは…」

「三浦、俺が教えてやる。修学旅行で戸部が海老名さんだっけか、その人に告白したいらしくて奉仕部に依頼が来た。そのあと、海老名さんが今の関係がいい。だからその告白を断ってほしいと遠回しに依頼されて俺が嘘告白をして戸部の告白を阻止した。まあその結果葉山グループは今も保てるって訳だ。でもこれは元々葉山に依頼したものが奉仕部に丸投げの形で依頼してきたんだ葉山は。まあ、お前には何も言っていないみたいだな」

「隼人。なんで私に相談してくれなかったし！」

「それは…」

「そっか。あーしは信用されてなかったって事ね。隼人、あーしアンタとは縁切るし」

「待ってくれ優美子！」

葉山と三浦は口論しているが、俺は今の状況をみて言うことかと思つた。なぜなら今のこの世界は俺が起こした崩壊現象でほとんどなにも残っていないく崩壊は着実と進んでいる。無意味な言い合いなのだ。俺は気づかれないようにその場を去り、リリスの方へ向かう。

「リリス、悪いな。こんな変なものを見せて」

「いえ、問題ありません。でもこうなった理由をいつか教えてくださいね」

「まあ、そのうちにな」

俺はそう言つて、リリスとビブリア学園へと向かった。小町の偽物は、とつくにどっかに行つてしまった。その後、俺たちがいた世界は跡形もなく悲鳴と共に滅んでいったのだつた。

☆☆☆

ビブリア学園へ移動中にて

「なあ、リリス。俺はまた1年生からやり直しなのか？」

「いえ、2年生の4月から始めてもらいます。制服もこちらで用意してあります」

リリスがそう言つて、魔法で制服を俺に着せた。

「わかつた。制服はこんな感じか。いろいろとありがとな、これから…よろしく頼む」

「ええ」

そう言葉を交わして俺たちは無事ビブリア学園に到着した。

☆☆☆

俺はビブリア学園に着き、リリスと一緒に歩いていると

「号外ですよ！なんとこの学園に転入生がやってきました。噂だと魔王レベルに匹敵する

らしいですよ！」

とそんな声が聞こえた。まあ、俺の事だろうと思いつつ、横を通り過ぎるとその子に声をかけられた。

「あのーこれどうぞ」

そう言われたので俺は

八 「ああ、どうも」

そう言い号外を受け取った。つてかステルスヒッキーが効いてない！効かないのかなこの世界では…と俺が思っている

「あれ？もしかして転校生の方ですか？」

「俺は…」

俺は質問に答えようとしたが

「八幡。なにをしているのですか？早く行きますよ」

リリスが遮った。さりげなく下の名前と呼ばれた気がしたが、俺は気にせず「ああ、わかった。すまんが俺はもう行くわ」

「えー！話が聞きたかったのに」

彼女はそう言つて、残念そうにしていた。そして、俺はリリスの後ろを付いていった。しばらく歩き、教室前に着いた。

「では八幡には早速、教室に入って自己紹介をしてもらいます」

「自己紹介とかしたくないんだけど、しないといけないのか？」

「当たり前です!!？」

「目立ちたくないなあ」

俺はそう言ってリリスと一緒に教室に入った。教室に入ると中が騒がしくなった。

「みなさん、静かにしてください。転校生を紹介します」

「えー、比企谷八幡です…ってリリスは先生なのか？」

「はい。でも、一応同い年です。それより自己紹介はそれだけですか？」

「他に言うことないしな」

「そうですね。では、みなさんからなにか質問とかありますか？」

リリスがそんな事を言い出した。すると、さつき号外をくれた女の子が

「はーい。質問ですっ!!？」

「はい、セリナさん。どうぞ」

ふーん、セリナっていう名前なのかと俺が思っていると

「好みの女性を教えてください」

セリナが俺に質問してきた。

「養ってくれる人だな」

俺はそう答えた。

「なんか、期待してたのと違う」

「すまん。俺にあまり期待はしない方がいい」

「そうですか」

「気が済みましたか？それでは…」

「じゃあ！魔王クラスにしか出来ない”世界構築”をしたのは本当なんですか？」

セリナはリリスの話を遮り、また質問した。リリスはその質問に驚いてはいたが俺は

「ん？ああ、あれか。まあ一応してみたのだがみんなもできるんじゃないのか？」

とそう答えた。すると

「ちよつ…八幡！」

「おー！本物だー！魔王候補キターー！」

とクラスメイトは騒ぎ、リリスは困惑していた。俺も変に目立ってしまった。結局、

この話で授業が丸々潰れた。そして授業後、俺とリリスは学園長室に向かった。

l t o b e c o n t i n u e d l

第02話 超秘密組織王立ビブリア学園の内情

俺とリリスは学園長室に着き、中に入った。リリスがさっきの授業での事を学園長に報告していた。

「あはははっ！いきなり初日から魔王候補呼ばわりとはね」

学園長は笑いながらそう言っていた。

「笑い事じゃありません、学園長!!？今日は授業にならなかつたんですから」

「授業どころじゃなかったな。ずっと俺の方ばかり見てくるしあの視線はやめてほしい。ぼっちにはきつかったわ」

「自業自得です!!？」

「はっはっは！」

学園長はずっと笑っていた。

「あー、面白かった!!？さて…はじめてまして比企谷八幡君！学園を代表して君を歓迎するよ」

「そりやどうも」

「……王立ビブリア学園はご存知の通り魔道士を育成する超秘密組織だ」

「ご存知の通りって言われても初耳なんですが…」

「ここは秘密組織の学園ですから」

「それでは話を続けるよ。この学園は各国政府からの資金援助を受け、極秘に様々な未解決事件や魔道的と思われる不可思議な事件を調査・解決するのが魔道士、別名”メイガス”というわけさ」

「なんか凄そうだな。まあ、だいたいはわかった。それになれば小町を助けられるって事だよな？」

「さあ、どうだろうね。私からは断言はできない」

「どういう事だ？」

「魔道はすべての可能性を否定しない。つまりできるかできないかは、キミ次第で決まるのさ」

「そういうことか。じゃあ、近道とかないのか？」

「どんなことにも近道なんてものはありませんっ！日々の努力と鍛錬が道を作るのです。わかりましたか八幡」

「でも、学園長が言ったようにすべての可能性を否定しないなら近道ぐらいあるんじゃないのか？」

「そっ…それは…」

「はっはっは！うん、確かにその通りだね」

「学園長！面白がらないでください！」

「まあまあ、いいじゃないか。彼の言う通り間違っではないわいわけだし。まあ、近道とまではいかないがこの学園には7人のボスキャラみたいな子達がいてね」

「そんなのがいるんですか？」

「ああ、いるとも。トリニティセブン。そう呼ばれる各分野での頂点を極める7人の魔道士の女の子達さ。ちなみにリリスちゃんもその1人だよ」

「まあ、同じ年で教師やつてるぐらいだから当然か」

「そんなわけでそのトリニティセブンの娘達と知り合い、戦ったり手籠めにしたりすれば魔道士のなんたるかが手っ取り早くわかるかもしれないね」

「手籠めっ!?!」

「まあ、会ってみないことには始まらないな」

「そうですね…」

「というわけで八幡君！リリスちゃんの事よろしく頼むよ。他のトリニティセブンの娘達もね」

「そう、学園長は俺に言った。」

「ええ、わかりました。学園長の期待に添えられるか分かりませんができる限りのこと

はやるつもりです」

俺がそう言うのと、リリスはなぜか顔を赤くしていた。

「期待しているよ」

「それでは、失礼しました」

「失礼しました」

そう言って俺とリリスは学園長室を出た。

l t o b e c o n t i n u e d |

第03話 忍者の女の子とお風呂の女の子

学園長室から出たところでリリースが

「それでは、今から寮の部屋へ案内します」

そう言った。

「ああ。でも俺、服とか持ってきてないんだが」

「心配しなくても大丈夫です。必要最低限の物はもう置いてありますから。足りないものがあれば街にお店もあるのでそこで買えるかと思えます」

「ああ、わかった。それより上からの視線が気になるな」

俺がそう言うのと天井にいた女の子が

「よつと」

と言つて、俺の目の前に着地した。

「よく気づいたつスね」

「ぼつちは視線に敏感なんだよ」

「そうっスか。はじめまして比企谷八幡さん。忍者をやつてる風間レヴィっスよ」

「ああ、よろしく。つてか、魔道士じゃないのか？」

俺がそう質問すると

「この学園は様々な魔術を学べる環境がありますから」

リリースが俺の質問に答えてくれた。

「忍術も占星術もオーラ診断も房中術もみんな魔術っすよ？」

「ぼっ……」

「房中術か」

俺は最初は何なのか、分からなかったがリリースの表情を見たらなんとなくわかってしまった。

「くっくくく……。相変わらずリリース先生は純情っすね」

「とっ……とにかくっ……八幡。この方が先ほど学園長が言っていたトリニティセブンのお一人です」

「ふーん。この子がボスキャラねえ。そんな風には見えないんだが」

「まあ転入したばかりだから当然っすよね」

「でも学園長が言うには頂点を極めてるんだろ？」

「そうっすね。暗殺からエロイ忍法までなんだってこなすっすよ」

「へえー」

「コラーっ!!? 八幡も何感心してるんですかっ!」

「いや、なんか凄そうだなって」

「まっ、冗談っス。なかなか面白い人っスね」

「俺がか？」

「そうっスよ」

「まあ、それはいいとして他のトリニティセブンの5人はどんな人なんだ？レヴィとリリスはなんとなくわかったが他がよく分からないんだが」

「んー。自分とリリスさん以外だと…ああ！あの人たちっスね」

レヴィはそう言つて窓から中庭の方を指差した。

「今からちようど検閲任務に向かうみたいっスよ」

「あの人がそうなのか」

「そうっスよ。背の小さい方から説明するっスね。純粹に能力だけならリリスさん以上の山奈ミラさん」

「リリス以上か。なんか超やばそうだな」

「ん？どういう意味ですか八幡？」

なぜかリリスに睨まれた。

「いや、すまん。なんでもない。忘れてくれ」

「続きを話すっスよ。背の大きい人は純粹に攻撃力だけなら他の追随を許さない不動ア

キオさんです」

「ほんとなんかバトル漫画並みにやばそうだ」

「いつでもテコ入れの準備ができていていう方向っスね」

「にしてもこの学園は女ばかりだな」

「魔道は精神的、感情的なものの研究っスからね。男性には論理的、理屈的な思考が得意なせいかな、なかなか魔道に精通しないんっスよ」

「感情的な方がいいのか？それとも欲望に忠実になった方がいいとか？」

「いっ…いけませんっ！そういうのは節度を持ってですね…」

「ほら、リリース先生が真っ赤になってるの可愛くないっスか？」

「まあ、言われてみればそうかもな。昔の俺なら告って振られてるまであるな」

そう俺が言うと

「っ!!？もう知りません!!？」

リリースは顔を赤くしながらどっか行ってしまった。あれ寮の部屋に案内するんじゃないの？と俺が思っている

「いやーあんな嬉しそうなリリース先生はある意味で初めて見るっスね」

「え、そうなのか？」

「もっど”氷の女”って感じの人っスからね。リリース先生は」

「そんな感じだったか？そういう風には見えなかったが…」

「そうじゃなかったらきつと、あなたが特別なのもかもしれないっすよ？」

「どうだろうか」

まあ、でもリリスと一緒にいる時は別に嫌な気持ちとかには別にならない。奉仕部の奴らとは違う感じだし、なんだろうなこの感情は…

まあ考えるだけ無駄だと思えばそれ以上は思考を放棄した。その後、俺はなんとか自分の寮の部屋に着き、ベッドでくつろいでいた。

「ふう、なんか疲れたな。ここにもMAXコーヒーがあればいいんだが。そういえば魔道書は何処だ？」

「私ならここにいますぜ」

そう言つて、魔道書は俺の胸元に浮かび上がる。

「そんなとこにいたのか」

「なんだ、驚かないのか？」

「俺はそんなことでは驚かないぞ」

「そうか。それより疲れてるんだろ？風呂に行こうぜ」

「それもそうだな。行くか」

俺はそう言つて部屋に置いてあつた替えの制服をもつて男湯に向かった。

「ここみたいだぜ」

「にしてもデカイな。学園には男子は少なかったみたいだから小さいイメージがあったんだが」

「無駄に金かけてるんだろうな…ってことは、女湯はもつと豪華かもしれないぜ」

「だろうな。人数とか多いしな」

「どんな感じなのか私が見てきてやろうか？」

「いや、やめとけ。面倒な事になりそうだ」

そう言っただけは更衣室で服を脱いで魔道書を置いて大浴場に入ろうとしたところ、もう先客がいた。しかし先客は女の子だった。

「どうも、こんばんは」

「こんばんは」

俺はそう言っただけで浴場から出た。まさか女湯と間違えたかと思いい外に出て男湯かを確認した。

「やっぱりここは男湯だよな。じゃあなんであの子…」

そう呟いていたらリリスがちょうど、通りかかった

「リリスか、ちょうどよかった」

「どうしたんですか八幡……。ってそれより服を着てください!!？」

「タオル巻いてるから別にいいだろ。ってそんなことよりこの風呂は男湯だよな？」

「ええ、そうですが。どうかしましたか？」

「いや、男湯に女子がいたから」

「まさか…」

そう言つてリリースは男湯の更衣室へ向かった。俺も後に続いて入った。すると中にいた女の子は牛乳を飲んでいた

「アリンさんっ!!?ここは男性用ですよ!!?」

リリースはそう言っていたが

「誰もいなかったからいいと思って」

アリンっていう女の子はそう答えた。

「これからは誰かいるんですっ!!?」

「別に私は気にしない」

「気にしてください!!?」

そう2人がやりとりしていると俺とアリンは目が合つて

「すう……。きやー」

小さな声で叫んでいた。

「タイミングが違いますっ!!?」

「棒読みかよ…」

「……難しいのね」

そう言つてアリンはリリスに連れられ男湯から出て行つた。

俺は魔道書を持つて改めて風呂場に向かつた

「ふう」

そして、俺はお湯に浸かる。

「それにしてもさつきは驚いたな」

「ああ、そうだな」

「なんとなくだがあのアリンつて子、お前さんの妹に似ていたぜ」

「ああ、俺もそれは少し感じてた。アリンつて子は多分、小町に繋がっている気がするんだよな」

「ああ、そうだな」

俺はそう言つてしばらくの間、その事を考えながら風呂に入っていた。

l t o b e c o n t i n u e d |

第04話 夜の特別授業と空間閉鎖

風呂から上がって替えの制服に着替えて

自分の部屋に戻った。するとなぜかレヴィとセリナとリリスが俺の部屋にいた。

「おい、なんでお前らが俺の部屋にいるんだ？」

「八幡さんの取材です!!？」

「セリナさんに同じく取材っス」

「わっ…私はこんな時間に女子が男子の部屋にとというのが教師として許せなかったのだから…」

「いや、リリスも俺と同じ年だろ…」

「ですが…立場は教師ですからっ！」

「まあいいか。それでセリナ達は…」

「取材です!!？」

「それで、何を取材するんだ？」

「好きな食べ物とかありますか？」

「ラーメンとかだな」

「だそうですよ！リリス先生!!？」

「なぜ私に振るんですか？」

「じゃあ、八幡さん。惚れ薬入りのラーメン食べてみるっすか？」

「じゃあ今度頼むわ」

「惚れ薬入りでもいいんですか？」

「俺は一応魔王候補なんだろ。惚れ薬ぐらい無効化出来るかと思っただけ」

「そういうものですかね」

「そういうもんだろ。あ、それよりリリス。魔道について教えてくれないか？まだわからないことばっかりだし」

「え？あ…はい。それなら…」

俺がリリスに魔道について、教えてもらおうとした時

「リリス先生は根っからの教師ですからね」

「ああやってうまく勉強に持つていかれると弱いわけっすね。ゆくゆくは2人でイチヤイチャして…大人の階段を…」

とセリナとレヴィはそんなことを言っていた。

「そんなことにはなりません!!？」

リリスはそう言って、ちゃんと否定していた。

「リリス先生、いじり可愛いです」

「萌えリリスっスね！」

「あ…あなたたちは…」

「セリナ、レヴィ。そのくらいにしておけよ。それよりこれはそもそも一体なんなんだ？」

俺はリリスがこれ以上いじられないよう、セリナとレヴィにひとこと言つて魔道書の話へと変えた。するとリリスが

「…アステイルの写本です」

と答えた。

「アステイルの写本!!?それって本当なんですか!?!?」

セリナはそう言つて驚いていた。レヴィも声はあげなかったが驚いている様子だった。

「ええ、あくまでも学園長が言うには…ですよ?」

そう言つて続けて

「伝説の魔道書として有名であり、異世界の知識が宿ると言われています」

と、そう言つた。

「へえー、そんなに凄いのかこれ? つか魔道書は寝てるし」

写本、俺が学園に来るきっかけであり、消えた小町を探すための唯一の手がかりでもある。と俺が思っているとリリスが

「その写本については本当に詳しいことはわかっていません。何せ存在自体伝説のよなものでしたから。そもそも魔道士には“テーマ”という研究概念が必要なわけですが、魔道書はその“テーマ”について記されていて…」

そう、リリスが説明していたが途中に部屋全体が地震みたいに揺れ暗くなった。

「うわわわっ!!? 一体なんですか!?!」

「地震と停電みたいっスね」

「何が起きたんだ?」

俺がそう言うのと、さっきまで寝ていた魔道書が

「どうやら結界に閉じ込められたっぼいな。チツ…しょうがねえ」

とそう言うって光った。とりあえず部屋全体が明るくなったので俺は

「ドアは開かないみたいだな」

そう言うってドアノブを回していた。

「窓も開かないっス」

「それより結界ってなんだ?」

俺は魔道書に質問した。

「お前さんが以前作った世界のかなりスモール版みたいな感じだな」

「そうか」

「随分とあっさりと凄いいこと言ってますね…」

「まあ、よくわからん以上動揺しても意味ないだろ」

「ホント、冷静っすね。八幡さん」

「何事も冷静な判断が大事だからな」

「結界で空間が断絶されているとかでしようか。長年通っていますけどこんな事は初めてです」

リリスはそう言った。

「まっ、その辺りを考えて脱出するのが今回のゲームなんだろうな」

「ゲームって、まさかお前は脱出方法を知ってるんじゃないのか？魔導書」

「ああ、知ってるぜ。調べればすぐわかるレベルのものだな。だから答えが出てクリアできたら呼んでくれ。また寝るから」

そう言っつて魔道書は光りながら寝た。

「仕方ない、俺たちでやるしかないか。でもなんでこんな事をしたんだ？」

「多分、八幡さんが原因だと思っつすよ」

「俺が？何で？」

「おそらく魔王候補でもある八幡さんの力を試しているっス」

「おおうっ!!? カッコいいですねっ!!?」

「俺にはそんな力はないぞ」

「うわー、カッコ悪いですね」

「しようがないだろ、本当のことなんだから。まあ多少は足掻いてはみるけど」

そう言つて部屋内を探してみたが何もなかった。

「もう諦めるか」

「ダメですよ！それじゃあ部屋から出られないじゃないですか!」

俺とセリナが話していた時、なぜがその横でリリスがモジモジしていた。それを不審に思ったのかレヴィがリリスに聞いていた。

「リリス先生。どうかしたっスか?」

「え!? あっ…いえなんでも…」

「まさか…トイレに行きたいとか?」

「あ…いえ…その…」

「時は一刻を争いますよ!!? 八幡さん!!?」

「そうだな。この部屋が臭くなるのは嫌だしな」

「八幡さん。私からもお知らせっス」

「レヴィ、まさかお前もトイレに行きたいとか言うんじゃないだろうな？」

「そのまさかつスよ。八幡さん」

「おいおい」

「2人しておしっこ系ヒロインを狙うつもりですか!?!」

「さあ、セリナさんもこっちに来るつスよ」

レヴィはそう言つて糸に垂らした5円玉を揺らしてセリナにそれを見せていた。こんなのに今どき引つかからないだろうと俺は思ったが

「やめてええー」

と言つて見事に引つかかっていた。そして3人は固まって震えていた

「さすがにこの状況はヤバイな」

なんとか魔道書に答えを言わせるように仕向けないとな、よしこの案でいくか。俺はそう思い、魔道書が寝ていることを確認してリリース達に魔道書に答えを言わせる案を話した。

「その案でいきましよう」

リリースのこの一言で俺の考えた案を実行に移した。

「これが答えか！簡単だったな」

「わー！簡単でしたねー!!?」

「忍者的にもバッチリっすよ！」

「だから魔道書。お前の力がなくても答えが出たぞ」

俺が最後にそう言うシーンとなった。

「さ…さすがにそんな手で伝説の魔道書には通じたりなんて…」

リリースがそう言った後に

「ん？あ、なんだ？ベッドの下が怪しいってもうわかったのか？」

魔道書はそう言っただけをいった。

「「通じた!!？」」

「よし。ベッドの下だ！あとはよろしく」

俺はそう言った。

「忍法ちやぶ台返し!!？ベッドバージョン!!？」

そう言っただけでレヴィはベッドを浮かせ

「魔力サーチ！魔法基点発見!!？」

とセリナはそう言っただけでカメラでベッドを撮って魔力を探知し浮かび上がらせ

「結果…破壊…!!？」

リリースが銃を使って浮かび上がったところを撃ち、そしてベッドを破壊し、結果も壊した。ベッドが…とも思ったが、俺はドアを蹴り

「よし！これでドアが開いた。早くトイレに行つてこい」

そう言つて3人にトイレに行くように言った。3人がトイレに向かった後、俺は魔導書を話をしていた。

「はっはっは!!? お前さん、いいセンスしてるよ。まさか魔導書である私を騙すとはな」

「まあな、一刻を争つてたしな」

「お前さんの研究する”テーマ”がなんなのか楽しみでならないぜ!」

””テーマ”ねえ」

と俺はそうつぶやき、壊れたベッドをどうしようか悩むのだった。

☆☆☆

一方そのころ

「……!!? あっ……」

「どうだい? 彼は悪の魔道士になれそうかい?」

「難しいのね……」

「そうか、結界は破られたか」

「凄く適当な方法だったわ」

「そんな方法で結界を破るとはさすがだね、彼は。ふふ…楽しみだねアリン君。果たして八幡君がアリン君のつがいになる魔王候補なのかどうか」

「……」

そう言つて、この一件の首謀者である学園長とアリンは比企谷八幡の方を興味深く見ながら話をしていったのだった。

l t o b e c o n t i n u e d |

第05話 王立図書館検閲官トップとサード

あの一件の後、なんとか替えのベッドをもらって無事寝ることができた。そして次の日、普通に授業を受けようと教室に入った。しかし、それはできなかつた。なぜなら

「……………」ジーン

そうアリンが俺のを見てくるのだ。

「なあ、リリス。これはどういうことだ？」

俺はリリスに理由を聞いたが

「さあ？どうなんでしょうか？」

とリリスも理由までは知らなかつた。そして、廊下の移動や食堂へ向かう時もそれ以外でも、ずっとアリンは俺の後について来て、飯を食う時もジーンと見られ、さらにはトイレの時もついてきた。

「いやいやいや、男子トイレはさすがにマズイだろ」

「私は気にしない」

「いや俺が気にするから、超気にするから」

「……………難しいのね……」

「お前は、アリンだったよな」

「そう。私は神無月アリン」

「アリンちゃんだな」

と、そう親しげに魔道書は言った。

「魔道書？」

「はじめましてだな、私は”アステイルの写本”だ」

「ちよつと見せて」

「ああ」

そう言つて俺はアリンに魔導書を見せた。やっぱりどこか小町に似てるんだよなあ。俺の気のせいかもしれないが。とアリンを見ながらそう思つてると

「私の主が鼻の下を伸ばしてるぜ」

「えっちいの？」

「そうだろうな」

と、魔道書とアリンが話をしていたので

「違うわ！」

俺は否定した。断じて、そんな目では見てない。本当だよ？

「それは置いといてだな。なんで今日ずっと俺に付きまとつてんだよ」

「付きまとう?」

「ああ、俺のことをずっと見てただろ」

「……自意識過剰?」

アリンそう言って真面目な顔で聞いてきた。

「それは違う。あれが自意識過剰だったら俺はもう一回小学校から国語の授業を受けなおすわ」

「ジョーク…嫌い?」

「嫌いとかではないがそんなことを言ってもらえる友達がなくなってな。ぼっちだったし」

「ぼっち?」

「いや、それは気にしなくていい」

「難しいのね」

アリンはそう言って間を取り、今度は冷たい声で

「魔王候補……を見ていたの」

アリンはそう言った。急に冷たい声で言ってきたので俺は少し冷や汗をかいて

「そ、そうか…。それより、ちよくちよく聞くが魔王候補ってのはなんなんだ?アリン、教えてくれないか?」

「…悪い奴の親玉？」

「まあ、魔王候補って言われるくらいだからなあ」

「そしてそれがあなた」

「で、なんで魔王候補が俺なの？」

「その説明は先生の担当」

とアリンは言った。先生というのは多分リリスのことなんだろうと俺が思っている
とアリンが

「私は魔王の伴侶になるらしいから」

と、アリンはとんでもないことを口にした。

八幡 「は？ 伴侶？」

俺はびつくりして思わずそう聞き返してしまった。

「奥さん、新妻、若妻、幼妻どれがいい？」

「どれもよくない。ってかなんでそんなことになるんだ？」

「学園長が言ってたから」

「学園長が？」

俺がそう言っただけ疑問に思っていると

「呼ばれて飛び出たー!!？」

と窓ガラスから出てきて壁に激突していた。いやここ2階だと俺は思ったが、もうこれ以上関わると面倒になると思い、この出来事を無かったことにしようとして「詳しい話はリリスを見つけてから聞くとして、まずはリリスを探すか」とアリンに提案した。

「そうね」

そう言つて、アリンは俺の後についてきた。

「あれ?!? スルー?!? 八幡君! せめて、声かけてよ!!?」

と学園長は何か言っていたが俺は無視してアリンと一緒にリリス先生を探した。

☆☆☆

なんとか、リリスを見つけて近くにあった保健室で話を聞くことにした

「で、さっそくだが話をするか」

「婚前交渉?」

「なんでそうなるんだよ。そうじゃない。アリン、リリスにいろいろと説明してくれ」

と俺はアリンに説明するよう言ったが

「あなたたちを閉じ込めたこと?」

俺が説明してほしい事とは違うことを口にした。

「えー?!?!? あれはアリンさんだったんですか?!?!?」

アリンが聞いてもいない昨日の一件の事を話し、しかも自分が犯人ともとれる発言をしたのでリリースは驚きながらそう言っていた

「アリン。なんでそんな事したんだ？」

俺はそうアリンに聞いた

「学園長に「君の番だよ」って言われたから」

アリンはこう答えた

「あいつめ…!!？」

リリースは普段口にしない事を言っていた

「それで普通あんなことするかよ。で、他には？」

「裸を見られたのはあなただけ」

「八幡？」

リリースは俺を睨んでいた。

「あの風呂の件は事故だ。リリースも現場にいただろ」

「そ…そうでしたね。でもこないだのアレはアリンさんが犯人だったなんて…」

「あれは、結構やばかったな。なんたってリリースたちが…」

俺がそう言いかけたとき

「八幡！あれは忘れてください!!？」

と俺に強い口調でそう言った。

「あ、ああ…わかった。だから、リリス。ちよつと落ち着け」

と俺はリリスに言った。なんとかリリスも落ち着き、その様子をみてアリンが

「あそこに他の人がいたのは事故よ？でも待つのが面倒だったからつい…」

と、そう言った

「つい…であんな目にあつたのですね……」

「窮地に立たせれば魔王候補が崩壊現象を起こすんじゃないかって学園長が言つてた

から……」

「また学園長絡みか。なあリリス、どうにかならないのか？」

「ご心配なく、学園長はうるさかったので縛つて焼却炉に捨てて起きました」

そこまでするのかと俺が思っているとリリスが

「しかしなんで崩壊現象なんて……」

と呟く。

「多分、こういうことだと思う」

アリンはそう言つて、左手を広げ、

「右手を出して」

と俺に、そう言った

「あ、ああ」

俺もアリンの言われた通り右手を出した。アリンは自分の左手と俺の右手とを重ねた。するとアリンの指輪が光り文字が浮かんでいた。

「うおっ!!?なんだ!!?」

「なっ…アリンさん!!?」

そう言っただけで俺とリリスは驚いた。

「憤怒 (イラ) の ” 書庫 ” (アーカイブ) に接続、” テーマ ” を実行するわ」

とアリンが言うのと指輪がさらに光って、服がローブに変わった。そして辞書のようなものを出てきた。

「憤怒 (イラ) のアーカイブ…!!?メイガスモードに!!?」

リリスはそう言っていたが俺はよくわからなかった。それよりやばいな、この感じは。と俺は心の中で思っていた。

「私のテーマは ” 崩壊 ” だから…ほら」

とアリンがそう言うのとリリスが俺の方をみて

「八幡!!?」

と叫んでいた。

「アリン!!?何をした!!?」

俺は苦しいのをこらえながらアリンに聞いた。

「あなたの魔力を抑えている魔道書の制御を崩壊させたわ」

「なん…だと…」

「おいおい、ここでコイツの魔力を暴走させる気かよ!!?」

「!!? そんな事したらこの学園が…!!?」

「そう、崩壊現象に包まれる」

「崩壊現象…だと!!?」

俺がそう言うのとさらに体に衝撃が走った

「ぐあああ!!?」

さすがにこれ以上は魔力を制御できなくなり俺はそう叫んでいた。すると物が粒子へと変わっていった

「このままでは…危険すぎます、アリンさんっ!!?」

「そうね。でも私のテーマ”崩壊”に最も近い存在。どんなに人の道を外れていてもそれを研究するのが魔道士…でしょ?先生」

アリンがそう言っつてリリスに問いかけていた

「そうですか…それにしても…これほどとは…」

リリスはそう言った。

その一方で

「あわわ、何事です!?？」

「崩壊現象が発生してるみたいっスね」

「ええーっ!!？」

「ほら外に」

「黒い太陽…」

レヴィとセリナはそう会話していた。そして焼却炉にいたはずの学園長はというと

「ふー、やれやれ。いやはや…これはまた…アリンちゃん、派手にやるねえー。このまま学園崩壊!!？」　つというのも燃える展開だけど、そうもいかないかな？」

とそんな事を呟いていた。

そして、崩壊現象を起こしている八幡はというと魔力を最大に放出していた

「うおおおっ!!？」

と俺は叫んでいた。かなりやばい、背中に翼も生えた感触もあるな。と俺が思っていると

「八幡!!？」　つく…魔王候補の力がここまでとは

リリスは俺の姿を見て驚いていた。アリンもここまでとは思っていなくて、リリス同様に驚きを隠せないでいた

「こうなったら…」

と、リリスは俺に銃口を向けた。俺を殺すという選択に出たのだ。しかしアリンが俺の横に立ちそれを阻止していた。

「なっ!?? ときなさい!!?」

とリリスはそう言うが

「させないわ先生、彼は私の旦那様よ?」

とアリンはそう言つて拒否していた

「ですが、八幡を止めないと学園もあなたも…」

「私はこの崩壊の先に何かがあるのか知りたい。それが魔道を追求するということでしょう?」

とアリンがリリスに問いかけたとき

「なーるほど、そいつを止めればいいだけなのか」

と聞いたこともない声が聞こえた。その直後に壁に亀裂が入り粉碎して知らない2人が入ってきた。

「こりや、ビックリだな!!? 崩壊現象を止めて帰ってきたら、学園でも崩壊現象が起きてるなんてな」

「そんな…確か検閲任務中のあなた方が何故ここに!?!?」

「そんなもん、瞬殺で帰ってきたよ」

と言って保健室に入ってきたところで、俺は知らない2人と目があった。前にレヴィに紹介された不動アキオと山奈ミラの2人だったと思い出した。そして

「!?? 崩壊が停止させられてる…」

アリンが今の状況に気付き、そう言った

「私の魔術で同等の崩壊の力をぶつけて中和させています」

「っ!??!」

「私の”傲慢”（スペルビア）のアーカイブに属するテーマ”正義”の名の下に私の前で一切の不浄は許しません!!?!」

ミラはそう言った。俺はその会話を呼吸を整えながら聞いていた。すると

「…アキオ、彼を殺してください。この男が崩壊現象の原因であり起点です」

ミラはアキオにそう言い、俺を殺すように指示を出した

「あっさり言ってくれるぜ。まったく」

とアキオはそう言っていた

「いけません、アキオさん!!?!」

とリリスは青ざめた表情で言った。

「…っ!??! 身体が動かないわ…!??!」

アリンは八幡の前に立ち阻止しようとしていたができなかった。

「悪く思わないでくれよ。お前に恨みはないが…魔を討つのが私の役目なんでね!?!」
そう言つて俺を蹴ろうと俺に近づき、蹴飛ばした。その時、俺は小町を助けられなかった、この状況ですら、自分自身で解決すらできない事を悔やみながら俺は意識を手放した。

l t o b e c o n t i n u e d |

第06話 夢の中の少女

ー トリニテイセブン side ー

八幡がアキオに蹴られた後

「八幡!!?」

とリリスは叫んでいたが八幡の姿はない。

「ありがとうございます。アキオ」

「やれやれ…これで終わりつと…」

「彼の魔力が消えたわ」

「そんな…」

そう言つてリリスは床に座り込んでしまった。

「…さて、仕事は片付きました。帰りましょうかアキオ」

とミラが言つた直後、ゴゴゴと音を立て、また崩壊現象が始まつた

「崩壊現象が終わらない!!?」

「どういうことだ大将!!? アイツが崩壊現象の基点じゃないのか!!?」

「間違いないはずなのですが…、ですが考えられる最もシンプルな答えは一つ…」

とミラがそう言い

「まさか…八幡!!？」

リリスはそう叫んでいた。

l side out l

l 八幡 side l

俺はもう死んだ。と思っていたのだが、

なぜか暗い闇の中に俺はいた。

「どこだ…ここは？俺は、確かアキオの蹴りで吹き飛んで死んだと思っていたんだが」

と俺はそう言って辺りを見回す。何も無い。しかも、魔道書もどっかにいつてしまっている。もうダメなのかと思っていると、どこからかヴァイオリンの音がしていた。俺はその音がする方へ行った。すると目の前にドアがあった

「よし、入るか」

と俺は覚悟を決めてドアを開け部屋の中へ入った。すると見る限り、女の子といった部屋だった。そこに一人の女の子がヴァイオリンを弾いていた。そして俺と目が合うと、ヴァイオリンを弾くのをやめて

「ようこそ”ユイの部屋”へ」

女の子がそう言った。が、俺はユイという言葉聞き、思わず顔を顰めてしまった
「大丈夫？八幡お兄さん」

と女の子はそう言った。

「ああ、ちよつとユイって言葉が聞こえたもんでな。俺が前の世界にいたときにもユイって縁を切ったやつがいてな、それを思い出してちよつと変な気分になっただけだ。気にしなくていい。もう大丈夫だ、落ち着いた。それよりお前はユイって名前でないんだよな、なんで俺のことお兄さんって言ったんだ？」

「うん！倉田ユイだよ。んー、それはなんか、年上っぽかったからかな」

「そうか。で、ここはどこだ？天国ってわけではなさそうだが」

「お兄さんは必殺のアキオちゃんキツク!!？で木っ端微塵になりそうだったからね。ギリギリのところまで引つ張りこんだんだけどおかげで外も大変みたい」

そう言つてユイは俺に学園の様子をみせた。学園が粒子となつて消えているところだった

「おいおいマジかよ…」

俺がそう言つと

「マジだよ。このままじゃ学園崩壊だね」

とユイは落ち着いた様子でそう言った。その後

「そうか。どう止めるかだな…」

と俺がそう呟くと

「自分で止めようとするんだね」

とユイは俺に言った。

「まあ、俺が原因でこうなったからな」

「でも崩壊現象の止める方法は知ってるの？」

「それは知らないが、でも俺がどうかしないといけないんだ」

「ふーん。でも意外だなあ。お兄さんがそんなに熱くなるなんて」

「ああ。でも、もうこれ以上あれに巻き込まれる人を見たくないんだ。もう…失いたくないんだよ」

「そう。じゃあ、コントロールすることを考えなきゃね」

「そんなことができるのか？」

「うん、できるよ。お兄さん自身が自分の「テーマ」を見つけて、ちゃんと魔力であの力を支配するの」

「また、テーマか…」

俺はそう呟く

「そうっ！魔道を目指すなら研究テーマが必要なの。全てはそこから始まりそこに帰結するものなの」

「傲慢（スペルビア）、憤怒（イラ）、怠惰（アケディア）、嫉妬（インウイディア）、強欲（アワリティア）、暴食（グラ）、色欲（ルクスリア）、この七つの大罪を書庫（アーカイブ）としてその中からそれにちなんだテーマを探す。それがお兄さんがあれをコントロールをする一番の近道かな」

とユイが丁寧に説明してくれた。

「そうか、大体わかった。今の説明聞いて、テーマも決めれたし俺はもう行くわ」

と俺が言うと

「もう行っちゃうの?」

とユイが聞いてきた

「ああ、アレをなんとかしないとイケないし、どうにかしないとここも危なくなるだろ?」

「まあね。もう行けそう?」

「ああ、いろいろとありがとな。じゃあ行ってくるわ」

と俺はそう言ってユイの頭を撫でた。

「うん！またね！」

とユイと言葉を交わして俺は崩壊現象を止めるべく学園へと戻った。その後ユイはというとうと

「もつと頭撫でてほしかったなあ。また会えるといいね。お兄ちゃん」

と呟いていた。そしてお兄ちゃん呼びに変わったのを八幡が知るのはだいぶ後のことである。

┆ side out ┆

学園にて

「いよいよこのままだとジリ貧ですね…アキオ、いつそこの辺りの空間ごと消し飛ばしてしましましょう」

とミラはすごいことをさらつと言っていた。

「はあ!? ……つたく、無茶いうよな大将は」

とアキオが慌てながらそう言った後、床に亀裂がはいる。

「ん?」

アキオはそれに気づき床を見た

「うおつ!!?」

そして、俺は床から学園に戻ってきた。なんか変な感じだと思っていると

「なっ!」

「えっ…」

とミラとリリースは俺の変わった登場の仕方に驚いていた

「なんとか…戻ってこれた」

「八幡！生きていたのですか!!?」

とリリースは驚きながら俺の方を見てそう言った

「ああ、心配かけたな。俺は大丈夫だ。ユイに助けられたからな」

と俺が砂を払いながらそう言う

「アキオ…どうやらあなたは失敗していたのですね…」

とミラは冷たい視線でアキオにそう言った

「しっ…仕方ないだろ!!? ユイが庇うなんて思わないしっ!!?」

とアキオは子どものような反論をミラにしていた

「ではもう一度、今度は確実に仕留めてください」

とミラはまたアキオにそう命じた

「ちえっ…ホント人使いが荒いぜ…」

と文句を言っ俺の方に近づいた

「ちよつと待ってくれ。俺がこの崩壊現象をどうにかする。そうすれば、俺を殺す必要

はなくなるよなっ!」

と俺は言つてアキオを静止させ、ミラ達に問いかけた

「何を言い出すかと思えば……」

ミラは呆れながらそう言った

「そうですよ八幡!!? 崩壊現象をどうにかするなんてさすがにできません!!?」

「いや、学園長曰く「魔道はすべての可能性を否定しない」んだろ。だからやってみないとわからないだろ?」

「はあ、あなたみたいな目の腐った人に崩壊現象をどうにかできるはずはありません」

とミラが苛立ちながらそう言った

「まあいいじゃないかミラ。出来たらOKで出来なきゃ殺せばいいんだし」

とアキオが助け船をだし、そう言った

「はあ、わかりました。仕方ありません、いいでしょう。…ただ、少しでも失敗したら本当に容赦なく消滅させますからね」

とため息を吐きながらミラはそう言った

「ああ、それで構わない」

と俺が言うとりリスが

「……………」

無言のまま俺の方を見ていた

「おい、魔道書」

俺は魔道書に声をかけた

「あん？テーマは決まったのか？」

と魔道書はそう答えて、俺にテーマについて聞いてきた

「ああ、決まった。だから、気に入ったテーマならちゃんと俺に力を貸してくれよ」

と俺が言う

「いいぜ。気に入ったら契約を結んでやるぜ」

と魔道書は言ったので

「ああ、俺のテーマは…」 傲慢（スペルビア）の書庫（アーカイブ）”支配（インペ
ル）だ」

と俺は決めたテーマの名を言った

「はっはっは!!? 確かにお前さんに合ってるな。いいぜ、今ここにアステイルの写本は

”傲慢（スペルビア）の書庫（アーカイブ）に属する”支配（インペル）をテーマにするマスターと契約することを誓うぜ!!?」

魔道書は気に入ったようで俺との契約を誓った

「じゃあ、いくぞ。”傲慢（スペルビア）の書庫（アーカイブ）に接続…テーマを実行する!!?」

俺がそう言うのと制服から真っ黒な服になり黒いマントもはためいた

「そんな!!?八幡のメイガスモード…」

リリースは俺が変身したのを見て驚いていた

「もうこれ以上俺以外の奴に迷惑をかけるな。崩壊現象で溢れている魔力、ここに集まれ」

と俺が手を前に出してそう言うのと、手の周りから光が溢れて、崩壊現象を包み込むほどの光が放出した。その光が消えると、崩壊現象が消え、元の王立ビブリア学園に戻っていた

「成功したか…」

俺は周りを確認してそう呟いた

「そのようですね」

とミラは不満そうにそう言っていた

「じゃあ、これで俺は殺す必要はないよな」

「ええ。崩壊現象も止まっていますし、不本意ながら退くしかありません。…ただ、次は容赦しませんから」

「ああ、わかった」

俺がそういうと、ミラはどっかに行ってしまった

「はあ、疲れた」

ミラが部屋を出た後、俺はそう呟いた

「大丈夫ですか？」

と、リリスは覗き込むように俺の方を見てそう言った

「ああ。リリスか、なんとか大丈夫だ。俺はもう疲れたから部屋に戻るわ」

俺は崩壊現象を無事止めることができ、リリスたちにそう言って、自分の部屋に戻った。

l t o b e c o n t i n u e d |

第07話 夏だ!海だ!水着だ!バイトだ…

崩壊現象の一件が過ぎ、もう気づけば夏になっていた。別に夏はそんなに嫌いではない。なぜなら学生には嬉しい、夏休みがあるからだ。俺も正直嬉しいがこの状況ではまだそうは思えなかった。なぜなら

「何で俺がバイトなんか…」

そう俺は呟いていた。なぜなら俺は今

南の島でバイトをしている。前まで、働いたら負け

とまでいったこの俺がバイトをしている。

なぜこんなことになったのかは前回の話を読んでいれば分かると思うが崩壊現象を俺の意思ではないが、起こしてしまい校舎を壊してしまった。その罰としてバイトという労働を課せられたのだ。

だるいなあ。俺も海で一人、浮き輪でぶかぶか浮いてのんびりしたいなあと思つていと

「焼きそば2つください」

と客からのオーダーがはいった

「はい。2人前ですね」

「コーラ3つください！」

「はい」

「ホットドッグ1つ！」

「はい。少々お待ちください」

と俺はお客さんの注文を聞き迅速に対応する。

その後にさっきの俺の呟きを聞いていたのか

リリースが俺のところに来て

「自業自得です!!??::そもそもあなたたちが学園の校舎を壊したからですよ！」

とそう言った。

「そうは言ってもだな」

「そうよ…:だんな様のせいだもの。しょうがないわ」

アリンも俺のところに来てそう言った。

「ちよつと待て、俺も確かに悪いがほとんどアリンのせいだろ」

「つまり夫婦の共同作業？」

「夫婦で学園は壊さないとと思うが…:。ってか俺たちは夫婦じゃないだろ」

「難しいのね…:」

「いや…難しくないだろ」

そう俺らが会話していると

「と、とにかくっ!!?今後、校舎を破壊するような真似は一切禁止ですからね!!?」

とリリスは強い口調でそう言った。

「はい。すみません」

「…難しいのね」

と俺は謝り、アリンはいつもの口癖を言っていた

「しかし、罰でバイトならまだわかるが、なんで南の島でなんだ?」

俺は疑問に思っていた事をリリスに聞いた

「ああ、それはですね…学園長の希望で南の島で修学旅行が計画されていたんです。なので校舎が使えない今に実行してしまおうとのことです」

とリリスは答えた

「なるほどな。でも本当の目的はただ遊びたかっただけだろうな。で、その企画した学

園長は今どこにいるんだ?」

「学園に残って校舎を直しています」

「へえ…。やっぱり学園長は凄いな」

と俺がそう言った後にレヴィとセリナがやってきて

「あれでも学園長はこの世界で5本の指に入る大魔道士ですから」

とレヴィがそう言った

「お前らも来てたのか」

「それはペタ属性のみなさんを悩殺するためっス」

「つてそんなに私はペタじゃないですよ!!?」

「ペタ娘はステキですてモテモテですてマジMMですてね? 八幡さん?」

「俺に振らないでくれ」

と俺はそう言った。つてかレヴィのやつ変な喋り方になってないかと俺がそう思っている

「まあ、胸といえば…」

とセリナはそう言つてリリスの羽織つていたパーカーを剥ぎ取つた。すると赤いビキニが見えた。リリスは俺と目が合い、とつきに隠そうと胸元を押さえようとしていたがあまり意味がなかった

「ビキニつて凄いですね…」

とセリナはそう言つて頬を赤くしてリリスを見ていた

「そりゃほら、八幡さんを悩殺してメロメロにするために決まってるっス」

とセリナの後にそう言つて、俺をからかいながら俺を見てきた。リリスも俺の方を見

てきて何か言っただけで欲しいような目で見てきたので

「あー、その…なんだ。リリースの水着は似合ってる…思うぞ」

と俺はそうリリースに言った。

「あ、ありがとうございます」

リリースがそうお礼を言った。その後

「よかつたつスね。八幡さんに褒めてもらえて。それも八幡さんが崩壊現象を止めてくれたおかげつスね」

とレヴィはそう言った

「そ、それは本当ですか!」

そのレヴィの発言にセリナが反応してそう俺に聞いてきた。

「あ、ああ。メイガスモードってやつになって止めたと思う」

と俺はそう答えた

「おおおー!!? ついに魔道士デビューですねっ! それと八幡さんのはどんな能力なんですか?」

セリナは興奮し俺に近づきながらそう聞いてきた。

「えつと…どんな能力だっけな。アリンはわかるか?」

俺はセリナとの距離を取りながら、自分もよくわからないのでアリンに聞いた

「ええ。わかるわよ、だんな様。その場にある魔力を集めたり、前にはやってなかったけど魔力を打ち消す事もできるのよ」

アリンはそう説明してくれた

「そうなのか。説明ありがとなアリン」

俺はそう言つてアリンの頭を撫でた。アリンはなぜか頬を赤くして俯いていた

「へえ〜!!? 凄いです!!? じゃあ、今ここでメイガスモードになる事もできますか?」

セリナはまた興奮しながら俺にそう聞いた

「それは分からん。リリスにでも聞いてくれ」

と俺はリリスに聞くように言った

「リリスさん! どうなんですか?」

「出来ると思いますが、ほいほい見せていいものではないので……」

リリスがそう言った後に

「…なるほど!!?」

「リリス先生の胸みたいなものっすね」

とレヴィはそう言つて、リリスの胸を掴んだ

「ひっ!!? ひいあああ!!?」

リリスは突然、胸を掴まれたので悲鳴をあげていた

「こっ…これは凄いつス…!!?」

レヴィは興奮しながらさらに揉んでいた。リリスは普段は出さない甘い声を出していた。どんな甘い声を出していたのかはエロすぎるのでご想像にお任せするとして

「おい、レヴィ。その辺にしといた方がいいぞ。周りよりリリスを見てみる」

と俺はさすがにこの状況はやばいと思う、レヴィにそう言った

「え?」

レヴィは俺の言葉を聞き、周囲を見渡し、リリスの方を見た

「レヴィさん! いい加減にしてください!」

リリスは顔を赤くしながらレヴィにそう言ってレヴィに説教をしていた

「うう…足が痛いっス」

とレヴィは言っつてこちらに戻ってきた。まあ長いこと正座させられて説教受けてたから無理もないが。でも、これはレヴィが悪い。

「まあレヴィの自業自得だな。それよりリリスをどうするかだろ?」

俺はそう言った

「そうっスね。さすがにやりすぎたっス」

とレヴィはそう言っつて反省していた。リリスの方はというと

「もう、お嫁に行けないです…」

さっきの胸を揉まれたのを思い出したのか下を向いて座り、そう呟いていた。

「まあ、そう落ち込むな。リリス」

俺はそうリリスに声をかけた。その後

「そうっすよ。リリス先生、八幡さんがお嫁さんに貰ってくれるっすよ」

レヴィがそんなことを言っていた

「え？」

リリスも驚きながらこつちを見た

「ちよつと待て、なんでそうなるんだ」

「いいじゃないっすか！リリス先生みたいな可愛い人はあまりいないっすよ。八幡さん」

レヴィはそう俺に聞いていた

「それはそうだが、俺じゃなくてもいい男はたくさんいると思うが……」

一応肯定はしたが、まあリリスは俺とは釣り合わない。もつといい人がきつというはずだ。そんな事を思いながらそう答えた

「そうっすかね？」

レヴィはそう聞いていたので

「ああ、そうだろ」

俺はそう答え、続けて

「そんな事より気分転換に海で遊ばないか?」

とさっきの話を打ち切って、こう提案した

「まあ、それもそうっスね」

レヴィはさっきのことはもう聞かず、俺の提案に賛成し、そう言った

「はい!是非、行きましよう!」

とセリナも賛成しそう言っていた

「みんなもこう言ってるし、リリスも行くか?」

俺はそう言い、リリスに聞いた

「は、はい」

リリスはそう小さい声で言った

「ほれ」

と俺はそう言って手を差し伸べた

「あ、ありがとうございます」

とリリスは俺の手を取り、立ち上がってそう言った。

そのあと、みんながビーチバレーや海に入ったりなど楽しいひと時を過ごした。そして夕方になりみんなが旅館に戻りはじめた。俺もたまにはこういうのもいいかもなど

思いつつ俺も旅館へと戻った

l t o b e c o n t i n u e d |

第08話 露天風呂と錬金術師

俺は部屋に戻り、ベッドに寝つ転がった

「あー、疲れた」

「お疲れだな。マスター」

「なんだ魔道書か。ってかなんだマスターって？」

俺は魔道書にそう聞いた

「ん？ああ、契約者の事をそう呼んでるだけだぜ」

「ああ、そういうこと」

俺は魔道書の言葉を聞いて納得した

「それより、疲れてるんだろ。風呂には行かないのか？」

と魔道書は俺に聞いた

「そうだな。露天風呂もあるみたいだし、そうするわ」

「そんじゃあ、行こうぜマスター」

俺と魔道書がそう言った後、扉をノックする音がした

「どちら様で……ってお前らか。どうしたんだ」

俺はそう言つて扉を開けた。するとそこにはリリスとレヴィとセリナがいた

「八幡さん。風呂に行かないっスか？」

「私もそんな感じですよ！」

レヴィとセリナはそう言つていたが

「ちよつと待て。風呂は男湯と女湯しかないんだから、女同士で入つてこいよ」

俺はそう言つたが

「いえいえ、八幡さん。ここの旅館には混浴があるっス。だから一緒に行くっスよ」

レヴィはそう言つて俺の腕を引つ張つてきた。

「いや、余計に一緒に行きたくないわ。つてかりリスも教師なんだから止めてくれよ」

俺はレヴィの手を優しくはらいのけて、そう言つた

「私も止めたのですが、言うことを聞かなくてですね…」

「混浴ぐらいいいじゃないか、マスター。行こうぜ」

「魔道書もこう言つてるので行くっスよ」

「はあ、わかつたよ。行けばいいんだろ」

俺はそう言つてレヴィたちと風呂に向かつた。その道中に

「そういえば、八幡さんに聞きたいことがあるですけど、なんで魔道士になつたんです

か？」

とセリナはそんなことを聞いてきた

「えっ？そ…それは…」

なぜかセリナの質問にリリスが反応し、そう言っただけの方をチラッと見てきた。

「それはだな…崩壊現象で消えた妹を取り戻すために俺は魔道士になったんだ」

俺は簡単にセリナ達に説明した。

「そんな理由があつたんすね」

「私も八幡が魔道士になるって言った時はびっくりしました」

「まあ兄として妹を助けるのは当然のことだからな」

と俺が言うと

「さすが、だんな様ね」

アリンがどこからか出てきて

「うおっ！アリンいつの間にな…」

俺は一步後ずさりしながら言った

「さつきよ。風呂に行くって聞こえてきたから付いてきたの」

とアリンは言ったが今はアリンのことは置いて俺はリリスに

「そうか。それより、崩壊現象に飲み込まれた人を助けたことってあるのか？」

そう俺はリリスに聞いた

「ないわけではないでしょうが、そんな事例は今時点ではないですね」
リリスはそう答えた

「でも学園長はなんか知ってそうだよな。確かトリニティセブンを手籠めにした仲間
にしたりすればなんとかなる的な事を言ってた気が…」

俺がそう言うよと

「てっ…手籠め!!?」

セリナはそう言っつて頬を赤くしていた

リリス 「そんなことはしなくてもいいですからね。八幡!!?」

リリスはそう言い俺の方を見た

「いや、別に俺はそんなことしないんだが…そういうえばトリニティセブンって全員揃っ
たんだっけ?」

と俺はそう答えて話を強引に変え、そう質問した

「まだ揃ってないっすね」

レヴィがそう俺の質問に答えた

「えつと、確か…リリスとレヴィとセリナとアリンと…」

「後は、ミラさんとアキオさんですね」

「あれ?それだと足りなくないか。7人いるんだろ、後の2人は?」

と俺が聞くと

「1人はユイさん…って方がいるんですがほとんど学園では見かけないんです…」

セリナがそう言った

「ん？ユイなら1回だけだが会ったことあるぞ」

と俺がそう言うのと

「ええーっ!!? そうなんですか?」

セリナは驚きながらそう言った

「そんな驚く事か?」

「そりや驚きますよ! ユイさんは特殊な魔道士なので夢の中でしかお話できないんです

よ」

セリナはそう言った

「そうだったのか。じゃあ後の1人は?」

俺がもう1人を聞くとセリナは黙ってしまったが、リリスが答える。

「八幡が来る前に失踪したまま行方不明です」

セリナのかわりにこう答えた

「そうか、まだ全員とは会えないって事か」

「まあ、今はとりあえず会える人から会ってみるのはどうっすかね?」

「それもそうだな。いずれ会えると思うし、焦っても意味ないからな。っと風呂についてみたいだな」

と俺が言う

「じゃあみんなで混浴に入るっすよ！」

レヴィはテンションを上げて更衣室の中に入っていきリリスとセリナも続いて入っていた。

「つたく何で混浴に入るだけであんなにテンションが高いんだよ」

俺はそう言いながら外でしばらく待っていた。なぜと思うかもしれないが女の子と一緒に着替えるのはさすがにまずいので時間を空けて入る為だ。俺がさつき言っていた言葉を聞いていたのか魔道書は

「いいじゃないか、お誘いなんだろう。それと女の子と一緒に風呂に入れるんだから楽しもうぜマスター」

とこう言っていた

「俺にはハードルが高いんだよ。男湯の方がいいんだが」

と俺と魔道書が話をしていると

「やはりあなたは不浄ですね」

俺と目が合いミラはそう俺に言った

「ミラ達も混浴に来てたのか。あと話聞いてた？それと俺のどこが不浄なんだよ」

と俺はミラにそう言ったが

「あなたと初めて会った時から不浄と認定しています。では私たちは失礼します。行き
ますよアキオ」

とミラは言い混浴に行こうとしていたが女湯に変えていた。まあ俺といるのが嫌な
んだらう。

「つたく何でこんなに俺は嫌われてんのかね…まあいいや。風呂に行って、ゆっくり浸
かろう」

と俺はそう呟き、更衣室で急いで服を脱ぎ、風呂へと向かった。そして、扉を開ける
と

「八幡さん遅いつすよ」

と水着姿のレヴィにそう言われた。後のみんなも水着だった。

「わるいな。さつきミラ達とちよつと話してたから、少し遅れた」

俺はそう遅れた理由を言いながら身体を洗った

「え？そうだったんですか。ではミラさん達は今どこに？」

俺の言った言葉にリリスが反応し、俺にそう聞いてきた。なので俺は

「ああ、女湯の方に行っただ。俺がいるから混浴はやめたんだと思う」

とリリスにこう言った

「そうですか…」

リリスは納得した感じにそう言った

「それより、露天風呂は最高だ。はぁー生き返る」

「ほんとっスね」

「一生こうしていたいんだがな」

俺がそう言う

「それはダメですからね！」

リリスに怒られてしまった

「リリス、今のは冗談だから。っとそうだ！リリスに質問したいことがあるんだが」

と俺はそう言い、怒るリリスに謝り、質問していいかと聞いた

「いいですよ。なんででしょうか？」

「ふと思ったんだが、リリス達の魔術とかも俺が使えるのかと思ってな」

と俺はリリスに聞いた

「無理だと思います」

俺の質問にリリスは即答してそう言った

「じゃあ例えば俺がリリスの真似をして俺の魔術で同じものを作り出すって方法でもダ

メなのか？」

もう一つ質問をしてみたが

「うーん…それも無理だと思えます。私と八幡では書庫（アーカイブ）もテーマも魔術式も違いますから」

とリリスは言った。

「基本的に書庫（アーカイブ）がテーマが同じでもない限り他人の魔術のコピーは不可能っス」

リリスの後にレヴィも続けて言った

「そうなのか」

「魔術のコピーは無理だと思えますがそれでもトリニティセブンに会うだけでも意義はあるかもしれません。そこでそれぞれの得意な魔術を見せてもらうんです」

セリナもレヴィの後に発言し、ある提案をしてくれた

「…ああ、それはいいかもしれないっスね。八幡さんは魔王候補見習いみたいなもんですし」

レヴィもセリナの提案に賛成しそう言った

「そうか。じゃありリス。リリスの得意魔術を見せてくれないか」

なので俺はセリナの提案を利用し、リリスに魔術を見せてくれないかと頼んだが

「ま…魔術というのはですね…そう簡単に見せてはいけないものなんです…っ」

リリースはそう言つて拒否をしたが俺も後には引けないので

「頼む、リリース。見せてほしい、俺はこんなところで立ち止まるわけにはいかない。こうしてるあいだにも小町がどうにかなつていられるかもしれない。リリース達にも何かしら被害を受ける可能性だつてあるかもしれない。そんなのはゴメンだ。もう俺は大切な人を失いたくないし傷つけたりしたくないんだ。だから頼む」

と俺はそう言い、頭を下げたリリースにお願ひした

「…しようがないですね。これは借りですからね。八幡」

リリースは俺が頭を下げてお願ひしているのをみて渋々ではあつたが見せてくれることになつた。貸し付きだったが

「ああ、なんでも一つリリースの願ひをきいてやるよ」

俺はそれぐらい安いもんだと思い、こう答えた

「それでいいですよ。それじゃあ、やりますよ」

リリースはそう言つてアーカイブを開き、銃を作り出した

「これがリリースの魔術か」

俺がそう言うと

「そうです。これが私の魔術“錬金術”（アウター・アルケミック）です。物質交換が基

盤なので使いこなせるようになればこのような金属の生成変換は得意とするところ
です。それと……………」

とリリスが説明している最中に

「おい魔道書」

「ん？なんだマスター」

「さっきのリリスの話は聞いていただろ。俺の魔術とかでなんとか銃を生成できないか
？」

俺と魔道書はこんな会話をしていた

「つて八幡！私の話を聞いてましたか！！？」

リリスも途中から俺が説明を聞いていないのに気づき、そう俺に言った

「途中までな。それでどうなんだ魔道書」

俺はリリスにそう答えた後に、魔道書にできるかどうか聞いた

「できるぜ。どれ…ちよいとやってみるかな」

と魔道書は言つて術式を展開しようとしていた

「だから、さっきは無理だと…え？」

リリスは何かいいかけた後、魔道書の方を見ていた

「おっ」ゴッ

「プロセス1クリア、プロセス2クリア、プロセス3クリア」

と魔道書はそう言い、俺の胸のあたりで生成を初めて見事にリリスと同じ銃を作ってみせた

「おー！これがリリスの魔術か」

俺がそう言うのと

「え？そ…そんな…バカな!?？こんなに簡単に錬金術式が使えるわけがありません!!」

リリスは驚きながらそう言い、俺の手から魔道書が生成した銃を取って見ていた

「そりゃ、カンペキになってわけじゃないさ」

とリリスの発言の後に魔道書はそう言った

「えっ?」

「私は「お前さんの魔術」をマスター用にアレンジしてパクっただけだからな」と魔道書はどう作ったのかを説明していた

「そ…それって…」

「だんな様は…」

「他の魔道士の魔術すら使いこなせるかもしれない…」

「「「ってことですか…?」」」

セリナとアリン、リリスはそう言っていた

「まあそういうことだろうさ」

魔道書はその3人の発言を肯定した

「そうかやっぱり俺にはすでにマジカルな力があつたわけだ。よし魔道書、元の姿に戻ってくれ」

俺はよく分かつてはいなかったが凄いいことはできたんだろうと思い、魔道書に元の姿に戻るようそう言った

「了解したぜ。マスター」

と魔道書は言つて元の姿に戻つた

「というわけでなんとかかなりそうだな。本当にリリスありがとう」

と俺はそう言い、リリスにお礼を言つた

「え…ええ。役に立ったのなら私は嬉しいです…」

リリスも素直にお礼を受け取つた

「じゃあ俺はもう風呂から出て先に部屋に戻るわ」

「ええ、わかりました。それと明日は早く起きてくださいね。午前中にはここを出発して学園に帰りますから」

「ああ、わかつた」

そう俺はリリースとそう言葉を交わし、風呂を出て更衣室で着替え、夕食をとりそのあとすぐに部屋に戻り、明日に備えて早めに寝た

l t o b e c o n t i n u e d |

第09話 新たな崩壊現象

次の日の朝、俺は朝食を取ってから部屋に荷物を取りに行き、学園へと戻った。学園に戻るとまだ直している最中だった。しかし午後から授業を再開するようでそれまでは寮で待機するようにリリースに言われたので午前中は寮でくつろいでいた。そして午後になったので教室へ向かう。その道中俺は魔術のコピー能力か、これなら小町も助けられるかもしれないとそう自分の能力のことを思い出し今後の事を考えながら向かっていた。途中、リリースと合流し教室へと入った。すると

「ん？なんだ、みんな寝てるな。おいセリナ起きろ」

と俺はそう言いセリナを起こしてみるが起きなかった

「起きないな。これなら午後からの授業もなくなるな。よし俺ももうひと眠りするか」

と俺がそう言う

「八幡は寝なくてもいいですっ!!？」

とリリースに怒られてしまった

「まあ冗談だ。それより寝た奴らはどうすんだ？」

と俺はそう言った

「八幡さん。これは寝てるとかじゃないっすよ」

いつもどおりに突然現れてレヴィは俺の発言の後にそう言った

「そうなのか？とりあえず、この事を学園長に伝えないとな」

と俺が言うと

「そうっすね。リリス先生も行くっすよ」

「もちろん、そのつもりです」

レヴィとリリスもそう言って俺と共に学園長室に向かった

☆☆☆

そして、学園長室に入った。そこにはミラとアキオもいた

「彼女達のごとは別に気にしなくていい。何か言うことがあるんじゃないのかい？八幡

君」

と学園長に言われたので、俺とリリスで学園長に教室で起こったことを説明した。す

ると学園長は

「これは崩壊現象だね。強い魔力を持つ子……つまりキミら以外の生徒はみな寝てしまっ

た。そういう事だろうね」

とそう学園長は言った

「また崩壊現象か…」

と俺が言うと

「…というわけで…だ」

学園長は俺らを見渡しながら溜めてそう言った。

リリス達は学園長が次に何を言うのか緊張しながら学園長の方を見ていた。学園長はその視線を受けてから、立ち上がって扉を開けて

「よし、早速眠っているカワイイコちゃん達にイタズラしに行こうっ!!? 行くよ八幡君」

と学園長は嬉しそうにそう言った

「いえ学園長。俺は遠慮しておきます」

俺がそう言った後、リリスは鬼気とした表情で学園長の頬をパンツとビンタをした。

その後、学園長はというと

「…なにも殴らなくてもいいと思うんだよりリリスちゃん」

と頬をさすりながらそう言っていた

「ふざけるのもいい加減にしてください!!?」

とリリスは強い口調で学園長に言っていた

「まったく、バカバカしい。行きますよアキオ。これ以上の話は時間の無駄です。とつととその崩壊現象を消滅させればいいのでしょうか?」

とミラはそう言つて学園長に聞いていた

「そうそう!!?ここはみんなで力を合わせて謎の事件に挑む…!!?まさに王道な魔道学園マンガではないかなあと…ね!!?」

と学園長がうんうん頷きながらそう言うのと

「いえ、私たち以外は必要ありません。正直足手まといです。それでは」

ミラはそう言つてアキオと共に学園長室を後にした

「ここまで嫌われているとはな。それは慣れてるからいいとして…だ。学園長に聞きたいことがある」

と俺はそう言つた

「なんだね。八幡君」

「本当にこれは崩壊現象なのか?」

と俺が学園長に聞くと

「私も八幡の意見と同じです。どうなんですか学園長」

リリースも俺の言つたことに同意し学園長に聞いていた

「ああ、本当だ。学園の地下から膨大な魔力が溢れ出していてね」

と学園長はこう答えた。すると

「地下つてまさかユイさんっスか?」

レヴィが驚きながらそう言った

「ああ、あのヴァイオリンの女の子か」

俺もユイの特徴をあげ、そう言った

「ご明察のとおりだね。この現象は彼女の魔力が大暴走して起きている。それと彼女は学園の地下にあるダンジョンに住んでいてね」

と学園長はそう言った

「ダンジョンなんてあるのか？」

と俺は学園長に聞いた

「ここは魔道学園だからねっ!!?それで君達にはそこに行つてきてほしいんだ」

学園長はそう言ったが

「しっ…しかしですね。いくら魔力が高いからといって…まだ見習いである八幡を連れて行くのはどうかと思います」

リリスはそう言つて反対していた

「え?俺つて見習いの扱いなのか?」

と俺は見習いとは知らなかったのでそう聞いた

「そうです!まだちゃんと自分の魔術を使いこなせないでしょう!だからまだ見習いなんです」

リリスは強い口調でそう言い、俺に詰め寄った
「そ、そうか」

俺は一步下がりがりそう言った後に

「だけど八幡君は他人の魔術式を外部起動（マルチブート）できたんだろう？」

と学園長はリリスに聞いていた

「うっ…それはそうですが…」

リリスも学園長の言うことを肯定した

「理論上出来ないことを可能にした魔王候補…とても興味深いじゃないか。ぜひ行ってきたまえ。それに八幡君には崩壊現象を打ち消す能力も持っているようだしね」

と学園長は言った。そして俺たちで学園の地下のダンジョン探索をし崩壊現象をどうにかすることとなった

☆☆☆

そして俺達は学園の地下へと踏み入れた

「なんか変な空間だな。ここ」

と俺は率直な感想を言った

「普段はすごく普通の巨大迷宮なのですが…」

「いや、普通の巨大迷宮ってなんだよ」

俺はそう口にした。普通はないんだよこういうのはと俺が思っていると

「…魔道士はよく巨大迷宮に住むのよ」

アリンがそう言った

「まじかよ。ユイは一体何者なんだ」

「ユイさんは世界の裏側…夢の世界で過ごす魔道士っす。そしてそれこそが彼女のテーマといつても過言ではないってことっすよ」

レヴィがそう答える

「寝続けることがテーマの研究なのか？」

「ええ、だからこそ封印されてるっす」

「封印？なんでそんな事するんだ？」

「彼女は枢機（カルディナリス）クラスの魔力を持つてるっすよ」

「カルディナリス？」

と俺は知らない単語が出てきたのでそう聞いた

「わからなくてもいいっすよ。まあ、学園だと学園長の次のレベルっすよ」

レヴィはそう言った

「マジかよ。それはやばそうだな」

「そうなんです。抑えが効かない彼女はその魔力で危険を引き起こすんです」

リリースはそう言った

「危険なのか？みんな寝ちやうのがか？」

「…彼女の魔力はやがて世界すらも眠りにつかせるわ」

俺の問いにアリンがそう答える。

「世界が寝たらどうなるんだ？」

と俺がまた聞くと

「…世界の消滅っス」

レヴィがそう答える

「マジか」

「八幡に出会ってしまったから…魔王の力の影響を受けてしまったからという可能性が高いでしょうね」

とリリースは言つて、崩壊現象の原因をそう推察していた

「じゃあ、俺のせいどころなことになったつて事なのか？」

「いずれ7人のトリニティセブンに会うことになるつてことはわかつてたつスから、このようになるのは時間の問題だったつス。だから八幡さんは気にしなくてもいいつスよ。それよりミラさんに先を越されないようにとつととユイさんを探すつスよ」

「そう言ってもらえると助かる。それよりなんでミラより早く見つけられないといけないんだ？」

「ミラさんとアキオさんは見つけ次第ユイさんを消し飛ばすに違いはないっス」

「消し飛ばすってミラたちはそんな物騒なことをやってんのかよ」

と俺が聞くと

「はい。彼女たち王立図書館検閲官（グリモワールセキュリティ）は崩壊現象の完全除去（リ・フォーマット）が任務の1つですから…」

とリリスは答える

「…全ての不浄を消し去る。そのための団体…」

リリスの言った後に、アリンがそう付け加えて言った

「つまり、こういうことか。ユイが原因だからユイを消すということか？」

俺がそう聞くと

「そうっス。だからあの2人よりも先にユイさんを見つめる必要があるんすよ」

とレヴィは言った

「なるほどな」

「八幡さん、この先は危険なのでメイガスモードでお願いするっス」

とレヴィはそう言ったので

「あ、ああ…」

俺はそう言い、メイガスモードになった

「じゃあ、行くつスよ」

「…おや、迎えが出てきたつスよ」

「ああ。なんか影っぽいのが動いてんな」

「魔物ね」

アリンが影のことについてそう言っていた

「あれがか？」

と俺が魔物の方を指差して、聞くと

「はい。崩壊現象や魔力が乱れた場に現れる異世界の存在です」

リリスがそう答える。その後

「彼らは魔力とその持ち主を食べに来るのよ」

アリンが魔物の性質について述べていた

「じゃあ、俺がなんとかすればいいのか？」

「いえ、八幡さんは何もしなくていいつスよ」

「え？でもいいのか？」

と俺はそれでいいのかと聞くと

「じゃあ八幡さんはリリスさんの錬金術を今ここで使えるっスか?」

とレヴィが俺に問いかけた

「たぶん使えると思うが失敗する可能性が高いな。前はたまたま出来た感じがあつたし
…」

と俺は答えた

「なら後でまたレクチャーするので、八幡さんは体力を温存することをおすすめするっスよ。ここは私達に任せるっス」

とレヴィはそう言った

「すまないが、そうさせてもらおうわ」

俺がそう言うのとレヴィが先導して魔物を倒し俺達はダンジョンの最深部へと進む。その道中、

「レヴィって凄いんだな」

と俺はレヴィの姿を見ながらそう言った

「えっ?…ああ、そうですね。レヴィさんの実力は学園…いや世界的に見てもトップクラスと言えます。戦闘能力に限れば恐らく5本の指には入るか」と

リリスが俺の言葉を聞いてそう言った

「それは凄いな」

「でも今回はちよつと違う…」

「たしかにいつもは飄々としているのに…」

とアリンとリリスはいつものレヴィではないと感じてそう言っていた

「ユイに特別な意識でもあるんじゃないか」

と俺はアリンとリリスに言った

「そろそろ足元に気をつけて下さいっす。この先から至る所に罠が……」

と広い場所に着いてレヴィがそう言ったが

「なんか言ったか？」ガコツ

俺は聞き取れなくてそう聞き直していた。その時、何かを踏んでしまった

「もう、遅かったっすね」

とレヴィは俺に向かってそう言った

「え？なんか俺、やらかした？」

そう言つて、俺は今の状況が分からずにいた

「ええ、もうすぐ罠が発動すると思うっす」

レヴィはそう言った。その後には大きな球体みたいなのが転がってきて俺達はそれから逃げていた

「おい。これコテコテ過ぎるだろ!?!」

と俺が言うと

「迷宮にある罠の基本っスね」

とレヴィはそう言った

「おい。この先、行き止まりだぞ」

そしてこの先、道が無いのを確認し俺はそう言った

「…アリンさん!!?」

とリリスはアリンを呼んでいた。その後

「魔道書「黄昏の真説（ラグナ・ユグドラシル）」に記載した術式（マクロ）を実行…」

「テイワズ」（勝利）…」

アリンが術式を発動して球体を壊した

「助かった…」

「じゃあさらに奥に進むっスよ」

「あ、ああ」

そう言っただけで俺達はさらに奥へと進む

「だいぶ暗くなってきたな」

「そうっスね」

と俺とレヴィが会話していると

「ひゃああ!!?」

突然、リリスが悲鳴をあげた

「リリス! どうかしたのか?」

と俺はリリスに聞くと

「何かがいるんです」

とリリスが答える

「何かってなんだよ。…別になんもないけど、気のせいなんじゃないか?」

俺は暗い空間を見渡しながらそう言った

「いえ…そんなはずは…」

「暗くてよく分からんからな。明るくなれば原因とかわかると思うが…」

と俺が言うと、辺りが明るくなった

「リリスが言ってたのは、多分この魔物の仕業だな」

俺は影の魔物を見ながらそう言った

「はい。そのようですね」

リリスも魔物を見てそう言った

「それよりなんで明るくなつたんだ?」

と俺が疑問に思いそう聞くと

「私の魔術で明るくしたのよ。だんな様」

とアリンが答えた

「そりや凄いな。他にも指や書いたり唱えたりとかで出来ることってあるのか？」

と俺がアリンに聞くと

「魔道書に書いておいた術だけ…術式として登録してあるから…」

とアリンが答えた

「なるほど…ん？」

”エイワズ”（防御）

とアリンは呟く。するとアリンは俺の胸元に魔術の術式を発動させていた

「アリン、これはなんだ？」

俺はこの魔術の術式が何なのかを聞いた

「これは、防衛の術…だんな様が影にイタズラされるのは嫌だから…」

アリンはこう答えて術式を発動した理由を教えてくれた

「そうか…ありがとなアリン」

と俺は感謝の気持ちも込めてアリンの頭を撫でながらそう言った

「…うん」

アリンは撫でられたのが嬉しかったのか、笑顔でそう言った。そして俺達はまた奥へ

と進む

「ともあれ、やはり原因は、術式と詠唱……この2つを八幡は覚えなないといけないですね」と奥に進んでいるときにリリスはそう言った

「どう覚えるんだ？」

俺がそう聞くと

「まず、魔道書に術式つてのを登録しておくんすよ」

レヴィがこう答えた

「その上で詠唱を唱えると登録しておいた魔術が発動するのよ」

とアリンがレヴィの後にそう付け加えてそう言った

「なるほど」

「これをできるだけ早くマスターしてくれとありがたいっすね。なぜならユイさんを助けるには崩壊現象を消すことができる八幡さんの力が不可欠っすから」

「ああ、俺も助けられてばかりは嫌だからな」

「ちなみに自分はテーマが”期待”っすから、期待してるっすよ魔王候補さん？」

とレヴィは俺の方を向きそう言ったので

「まあやれるだけやってみるが、あんまし期待はするなよ」

俺はレヴィにそう言った

☆☆☆

「さて…そろそろ最深部っスね」

と最深部の一步手前のところでレヴィはそう言った

「結構歩いた感じはあったが、レヴィのおかげで楽に進めたな」

と俺がそう言うのと

「あの程度の影では束になってもレヴィさんには到底、敵いませんね」

リリースもこう言っていた

「そうね。敵になるとしたら…」

アリンがそう言った後に、横の壁が突然破壊された

「うおっ!!?!なんだ?」

と俺がびつくりしていると前からミラとアキオの姿が見えた

「ん? 何でまっすぐ来たのに、なんで先を越されてんだ?」

アキオは俺達が生にここにいたのが不思議だったのかそう言っていた

「レヴィさんはこの迷宮に何度も足を踏み入れているからでしょう」

アキオの疑問にミラがそう答えていた

「つてか、まっすぐってどういう意味だ?」

俺はまっすぐの意味をアキオに聞いていた

「ん？ああ、まずは床を破壊してだな：後は一直線に壁を破壊だ!!？」
とアキオは俺の質問に答えた

「なんか凄いな。つてかよく俺はその蹴りを受けて生きてられたな」

とアキオの答えに俺がそう口にする

「本当だぜ。まったく」

とアキオはそう言った

「さて、行きますよ。アキオ」

「ん？」

「レヴィさんが、ここにしていることがこの先にユイさんがいる何よりの証明です」

「いやいや、ちよつと待ってつて!!？行つてユイを殺すんだよな!!？」

とアキオは慌てながらミラに聞いていた

「はい、消滅させるつもりです。崩壊現象の原因ですから」

とミラはそう言い、ユイの方へ行こうとしていたが

「そんなことはさせないぞ」

と俺はそう言いミラの行く手を阻んでいた

「私達の邪魔をするなら、まずあなたから消滅させてあげます。力の差を見せてあげましょう」

とミラは言った

「なんか、やばそうな雰囲気しかないな…」

俺はミラの様子を見て、そう言った

「しようがないっスね。八幡さんはまだ銃も使えるかわからない素人状態っスからね」とレヴィはそう言つて、俺の前に立った

「お、おい。レヴィ?」

「へえ…もしかしてレヴィが相手してくれんのかい?」

とアキオが聞くと

「こういう熱い展開もちよつと面白いっスよ」

とレヴィは答える

「確かに!!? 私もレヴィと一度本気でやってみたかったんだよな!!?」

アキオは嬉しそうにそう言い、闘いの態勢に入ろうとしていた

「アキオ!!? そんな時間は…」

ミラはそう言ったが

「どの道ここでレヴィ達に邪魔されちゃあ進めないだろ? やるしかないって!!?」

アキオはそう答えてミラにレヴィと闘っていいかを聞いていた

「ふう…わかりました。なるべく早く済ませて下さいね」

ミラは溜め息をついて、そうアキオに言った

「おうっ任せとけ!!?」

アキオは笑顔でそう言った

「ここは自分が引き受けるんでリリス先生達は先に行ってくださいいっす。ユイさんを助けられるのは八幡さんだけっすからね」

レヴィはアキオとミラが会話している時に俺達にそう言った

「…了解しました」

「わかったわ…」

とリリスとアリンは言った

「すまんがレヴィ、頼むわ」

俺もレヴィに謝ってこの場を託した。そして

「嫉妬」（インウィディア）の書庫（アーカイブ）に接続：テーマを実行するっす…!!
?” 神風招来”」ゴオツ

レヴィはメイガスモードになり闘う態勢へと入った。その際、強い風が発生した

「きゃっ…!!?」

とそうリリスは声をあげて、スカートを抑えていた

「うおっ!!?なんて風だ」

と俺もそう言い、その風に耐えていた。すると視界にパンツのようなものが見え「…ん？これはウサギの…パンツ…？」

と俺はそう口にしていて。そして誰なのか見るために上を見た、ミラだった。そして俺とミラは目が合い

「っ!!？アキオ!!？早く終わらせてこの不浄な男の腐った眼球を潰してください」
とミラは頬を赤くして、そうアキオに命令した

「いや、ちよつと待て!!？俺は悪くない!!？勝手に視界に入ってきただけだ」
と俺はミラに言ったが

「そんな言い訳はいりません!!？アキオ!!？」

とミラは言った

「…大將は純情だなあ」

アキオは俺たちの会話を聞いていたのか、ミラに対してそう言っていた
「いいから早くっ!!？」

とミラはアキオにそう言っていた

「八幡…!!？今のうちに行きましょう」

とリリスはそう言ってユイの方へ行こうと俺に提案した

「ああ、そうだな。早く行った方が身のためだな」

俺はリリスの提案に乗り、即時この場を離れた。そしてユイの部屋の前に着いた。

「ここがユイさんの部屋です」

「…なんだこの看板」

と俺が言った。それもそのはず。普通の部屋なはずなのに営業時間なども書かれているのだ。こんなものいるのかと俺が思っている

「…迷宮の奥にいる邪悪な魔道士のお約束よ」

とアリンは答えた

「書いたのは学園長かレヴィさんでしょうね。それでは開けますよ」

リリスはそう言い、ユイの部屋の扉を開けた。すると何かが溢れ出てきた

「なんだこれ？」

俺はそう言い、溢れ出てきたものを見ていた

「…凄い瘴気」

リリスの方もそう呟いて、俺と同じで溢れ出てきたものを見ていた

「…おいおい、なんだあれは」

と俺は辺りを見渡しながらそう言った。その直後

「ユイさんっ！！？」

そうリリスがユイの名前を呼んだ。俺もユイの方を見る。すると影の竜と一緒にい

る裸の姿のユイが
そこにあつた

l
t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
l

第10話 魔術起動と一撃必殺技

「ユイさん!!?」

とリリスはまたユイの名前を叫んでいた

「え?あれがユイなのか?でも夢の中で会った時とはなんか違うような…」

「夢の中では姿が違うのよ。あれはユイの理想の姿」

と俺の呟きにアリンはそう答える

「そうなのか…それより裸の姿はやばいだろ」

俺はユイの裸姿を見てそう言った

「八幡は見てはいけません!!?」

とリリスは言ったが

「そうは言ってもな…それよりあの竜はなんだ?ボスキャラみたいなやつか?」

俺はそう言って、ユイの方を見ないようにしてリリスに竜の事を聞いた

「…はい。あれは、崩壊現象の際に現れる魔物の上位種で…」

とリリスが説明していると竜が俺の方を見て目を光らせた。俺も竜と目があつた。

その時、身体に違和感を感じその後、すぐに体中に激痛が走つた

「うっ!!?」

俺はその激痛に耐えきれず膝をついてしまう

「八幡!!?」

「だんな様!!?」

リリースとアリンはそう言って俺の方に駆け寄り心配そうにしていた

「なんとなくだが、この感じはヤバい気しかしないな…」

と俺が言った後、背中からまた前の崩壊現象のように羽が生えてきた

「多分、だんな様とあの竜の魔力が共鳴し合っているからだと思うわ…」

とアリンはそう言って、俺の羽が生えている原因をそう推察していた

「そんな…では八幡は…」

とリリースが言った後に竜が俺に向かって攻撃をしてきた

「…っ!!?」

アリンは俺の前に立ち攻撃を受けた

「アリン!!?大丈夫か!!?」

と俺はアリンに声をかけたが

「いけません!!?八幡!!?」

とリリースがそう言った後、また竜が攻撃を放つ

「『認識顕現』（リアライズ）”バスターモード”!!？」

とリリスは言つて竜が放つた攻撃を自分の銃弾で跳ね返した
「…倒せたのか…？」

と俺は聞いたが

「まだよ。相手の魔力は全く弱まっていないわ」

アリンはそう答える。その後

「おー!!？やつてるやつてる!!？邪魔するぜい」

とアキオは言つてユイの部屋へと入った

”Dの幻魔（コードD）…やはり顕現していましたか…”

とアキオの後にミラはそう言つてユイの部屋へと入った

”Dの幻魔（コードD）…幻想が実体化した存在…か”

「…お前ら、なんでここに…」

俺はミラ達にそう言つた後

「それより、レヴィはどうした？」

レヴィがこの場にはいないのに気づき、俺は続けて、ミラ達にそう聞いていた

「確かにそうですね…」

リリスも俺と同じ事を思ったのかそう言っていた

「2人がここにいてるってことは…」

「まさか…レヴィさんは…」

とリリスが心配そうに言った後

「呼ばれて飛び出たっス」モミモミ

とレヴィがリリスの背後から現れ、リリスの胸を揉んでいた

「…っ!!? ひゃあああ!!?」

リリスは急に胸を揉まれて悲鳴をあげていた

「そうだった…レヴィはいつもこんな登場だったな…レヴィは死ぬわけないよな…」

と俺が呟いている一方で

「一時休戦?」

「まあ、あんなのが現れちゃ悠長に遊んでらんないわな」

「幻想種の中で最強と謳われるドラゴンの形態をした幻魔…アキオ1人では手に負えない可能性もありますからね」

「まあ、ちよつくらやってみつけど…それじゃあ、いくぜっ!!?」

と俺らとはちよつと離れたところで、アリンとアキオとミラはそう会話していた

「援護します」

リリスもアキオ達が攻撃を仕掛けるのを見て、加勢し竜退治へと向かった。俺はと言

うと

「…にしてもこの痛みはなんとかならねーかな。さすがに限界がきそうだな」

まだ痛みがあり膝を床につけている状態でそう呟いていた

「大丈夫っスか？八幡さん」

とレヴィは俺にそう聞いてきたので

「かなりやばい」

と俺はこう答えた

「じゃあ、呼吸を整えて魔道書に意識を集中させるっすよ。そうすれば、かなり楽になる

と思うっス」

とレヴィは楽になる方法を教えてくれた

「ふう…」

と俺は深呼吸をしながら魔道書に意識を集中させた

「どうっスか？」

「だいぶ楽になった。…にしても竜と戦うとかバトルアニメみたいだな…」

と俺がそういうと

「八幡さんも混ざりたいっスか？」

とレヴィは俺にそう聞いてきた

「どうだろうな…それよりレヴィはどうするんだ？」

と俺はレヴィに戦いに加わるか聞いた

「もちろん行くつスよ。ただ…自分は八幡さんにも戦いに参加してほしいので」

レヴィは加わる意思を示し、そう言った

「あの大バトルにか？」

「ええ…崩壊現象を消す魔道士のバトル…妹さんを探すならいずれ八幡さんも頑張らなきゃいけないそんなバトルつスよ」

とレヴィは俺にそう言った

「そうか…なら俺も参加しないと。なあレヴィ。俺に戦うための方法を教えてくれな
いか？」

俺も覚悟を決めらレヴィに戦い方を教えてもらえるよう頼んだ

「もちろん、いいつスよ。さつきレクチャーするつて言つたつスから…そしてそれが
ユイさんを救う一番の近道でもあると思うつスから」

とレヴィはこう答えた

「レヴィとユイは…本当に仲良しなんだな」

と俺はレヴィに言った

「いえ…自分は他人に”期待”しない、ユイさんは誰かと”友情”を育んだりしない…
そういう似た者同士のマブダチみたいなのもんっスよ」

「そうか…でもレヴィは期待してないのか？」

と俺がそう聞くと

「魔道のテーマというの自分から一番遠く離れたもの…というのが定番っスから。だから期待できない私は期待しまくってるっスよ」

レヴィは笑顔で俺にそう言った

「そうか。なら俺がその期待に応えてやる。もう覚悟は決まった」

俺もそんなレヴィの笑顔を見てこう答えた

「そうっスか。…それと八幡さんは支配しまくりたいと思うっスか？」

とレヴィは俺に聞いてきたので

「ああ、こんな理不尽なことは2度とゴメンだ。だからこの『崩壊現象』を支配してやりたいんだ」

と俺は拳を握り、そうレヴィの質問に答えた

「…OKっス。リリース先生!!？」

そう言い、レヴィはリリースを呼んだ

「はいっ!?？」

リリスも急に名前を呼ばれたので驚きながらも返事をする

「八幡さんに魔術のレクチャーをお願いするっス」

とレヴィはリリスに言っていた

「はい、了解しました。ミラさん、しばらくお願いします」

とリリスはミラに言って、俺の方へと向かう

「……」

ミラは無言でこちらをみていた

「いいですか八幡。まずはさつき、私が唱えたみたいに詠唱を決めてください」

とリリスは俺にレクチャーを始めた

「詠唱……」

と俺が呟くと

「そうだな…それが決まれば私もやりやすいよ」

魔道書はそう言った

「そうか。なら…リリスのと同じでもいいのか？」

と俺は魔道書に聞いた

「問題ないぜ。やるのは錬金術だろうから、むしろ被せるのはアリだろうな」

と魔道書は賛成した

「なら、それで…」

俺は魔道書の言った後にそう言うのと

「おっと…しかし注意しろよ。マスター」

と魔道書は俺に注意を促した

「何をだ？」

俺は何に對してかを聞いた

「マスターは魔道を短い期間で結構使ってるからな」

と魔道書は答える

「なんかまずいのか？」

俺は魔道書にそう聞いた

「ああ、ほいほい使ってるといつか魔に喰われるぜ？」

と魔道書はさつきとは違い、低い口調に変えてそう言った

「魔に喰われる？ どういうことだ。リリースは何か知ってるか？」

俺はふと疑問に思い、リリースに知ってるか聞いた

「…錬金術というのは物質交換の定理に縛られています。魔道士の場合、魔力や精神そのものを対価として錬金精製をするということです。多用しすぎた結果、魔物そのものに成り果てる魔道士も少なくありません…」

とリリスは答える

「じゃあ、今までの魔物の正体は…魔道士ってことか」

リリスがそう説明した後、俺はこう言って推察した

「ご明察の通り、アイツらは別の世界で”魔”に喰われた成れの果てさ。ちよいと魔術に失敗したり暴走させたりしたらお前さんも魔に落ちるかも知れないぜ。特にお前さんの場合、魔王クラスだからな。あのドラゴンよりも厄介な化け物になるだろうさ」

と魔道書は俺の推察を肯定し、その後、俺も魔に喰われる可能性があり、それもか나의 化け物に変わる可能性があると言った

「俺が？あれに…？」

と俺が呟くと

「八幡…」

とリリスは心配そうに俺の方を見ていた

「どうしたマスター？さすがにブルったかい？」

と魔道書は俺にそう聞いていた

「…そんなわけないだろ。そんな事はわかってたことだ。上等だ、やってやる。こんなところで負けてはいられないからな。俺の精神だろうが魔力だろうがなんでも持つていけ魔道書！そんなのは小町やユイを助けるためならそんなものはくれてやる覚悟だ」

俺は魔道書の言ったことを否定し、戦う覚悟を決めてそう言った

「八幡……」

リリースも俺の言ったことに驚きながら俺の名前を呟いていた

「だが、俺は負けない。全て、俺の手でそれすら支配してやる」

と俺はリリースの後に続けてそう言った

「ははは！ いいぜマスター!!? お前の魔力、才能、可能性を全て私にぶつけてきやがれ」

魔道書は俺の言葉を聞き、笑いながらそう言った

「よく言ったつス。八幡さん」

と魔道書の後に俺の名前を呼んでから

「自分からの最後のレクチャーつスよ。コツは「魔道書が銃になる」そのプロセスを頭で

イメージすることつスよ」

とそう言った

「なるほどな……」

「銃にはグリップがあつて、銃身がありトリガーがある」

そして俺の右手を取つて、銃の型を作つた

「形になつてるな……」

俺がそう呟いた後

「…そして」

「ここに自分の魔力も乗せたっス。これで指先から魔力の弾を発射する…そういうイメージでやるっスよ」

とレヴィがそう言っただけで俺の人差し指を口で咥えて自分の魔力を乗せた

「ああ、そうだな。指先に魔力を銃になるようにイメージして」ボソッ

と俺はそのレヴィがした行為に恥ずかしくなりながらもそう言っただけで、レヴィから受け取った魔力を使い

「いくぞ魔道書!!? 『認識顕現』(リアライズ)!!?」

リリスがいつも使っている詠唱を唱えた

「OK、マスター!!? 術式を実行するぜ!!?」バツ

魔道書も俺の言葉を聞き、術式を発動させた。

そして、見事に銃を具現化させた

「できたか…」

と俺は具現化した銃を見て呟く

「!!?」

「何…っ!!? この物凄い不浄な魔力!!?」

アキオとミラは俺が銃を具現化させていたのを見て驚いていた

「悪いがみんな、どいてくれ」

と俺はそう言い、竜から離れるように言った。その後

「なあマスター。なんかカッチョイイ必殺技名でぶちかましてくれよ!!?」

魔道書が俺が放つ魔術に名前をつけるように言った

「俺にそういうのを求めんな。…まあそうだな。これでいくか」

と俺は言った後

「崩壊現象は消えろ。メテオパニツシャー!!?」

俺はそう言って竜に銃弾をぶちかました。ああ、なんて変な必殺技名をつけたのだろうと思っていると竜と崩壊現象は消えていった。なんとかユイを助けることができた。そして俺はユイに俺の上着を着せ、みんなユイが目覚めるのを待っていた。すると

「…んっ…レヴィさん…?」

ユイが目覚まし、レヴィと目が合ってそう呟いた

「おっ、気がついたみたいっスね」

レヴィは目覚めたユイを見ながらそう言った

「そうみたいだな。ユイ、大丈夫か?」

と俺はレヴィの後にそう言い、ユイに聞いた

「あっ、お兄ちゃん!!?」

ユイは俺を見て、笑顔でそう言った

「は？俺が？」

もちろん俺はユイのお兄ちゃんではないので俺のことなのかを聞いた

「うん！！？お兄ちゃんが助けてくれたんだね！！？大好きっ！！？」

とユイはそう言つて裸で俺に抱きついた

「ちよつと待て！！？まず服を着てくれ」

と俺はユイに言つた後

「ユイさんっ！！？八幡から離れてください！！？八幡もユイさんから離れてくださいっ！！？」

リリスが俺とユイに対して強い口調でそう言つた

「そう怒るな、とりあえず落ち着けリリス。俺だつてそうしたいが、ユイが離れてくれな
いんだよ」

と俺は言つて、リリスを落ち着かせようとしたが

「ユイはお兄ちゃんから一生離れないから」

とユイがまたそんなことを言つた

「ユイさん！！？」

リリスはそれに反応し、ユイとまた言い合つていた

「はあ、もうやだ。もうなんとかならないのか、この状況…」

リリスとユイが言い合っているのを見ながら俺はそう言っただけ抱えた

一方、レヴィの方はというと

「期待」に答えて”Dの幻魔”（コードD）を一撃で消し去る魔王候補の八幡さんは本当に面白い人っすね」

と離れたところで八幡とリリス、ユイが会話しているのをみながら笑顔でそう呟いていた

l t o b e c o n t i n u e d |

第11話 体育授業と夢世界

あの地下での崩壊現象を止め、ユイを助け出した後、俺はすぐ部屋に戻り、そのあとは風呂や飯を済ませて、自室に戻りすぐに寝た。

そして、朝になったので起きた。なぜか狭いと感じたので両隣を見たらなんとユイとアリンが寝ていた。まだそれならいいんだが、なぜか2人は服を着ていない。いわゆる裸姿で寝ている。これはまずい状況だ。2人がここにいるということはドアは開いているはず。誰かが入ってきてこんなところを見られたら、俺の人生は終わってしまう。そんなことを考えていると

「八幡!!? 起きてください。もうすぐ授業が始まるんですから…」

と扉を開け、リリスがそう言った。すると

「あ…」

リリスと俺は目が合い

「…っ!? な…なっ」

リリスは俺とユイ、アリンが一緒に寝ている所を見て、顔を真っ赤にさせていた
「リリス、これには深い訳があつてだな…」

と俺は言つてとりあえずリリスにこの状況を説明しようとしたが

「八幡〜!!？」

リリスはそう言つて俺の方へ来た

「あつ…終わつたかも俺の人生…」

と俺はそう呟いた。その後、アリンとユイは起こされ、俺と一緒にリリスに説教を受けた

☆☆☆

そして時間は過ぎて今は体育の授業を受けている。もちろん俺はサボっている。なぜなら授業内容がグラウンドをひたすら走ることだからだ。そんな面倒なことはしたくない。そう思つてると

「えいつ」

とユイが俺に抱きついてきた。

「おい、いきなり抱きつくなよ。ユイ」

俺はそう言つてユイを引き離そうとしたが

「いきなりじゃなかったらいいんだね。お兄ちゃん」

ユイは笑顔でそう言ったので

「もういいや。好きにしてくれ」

俺はそう言って引き離すのをやめ、抱きつくのを許した。押しダメなら諦めろだからな…

「うんっ!!?」

ユイは嬉しいそうにそう言った

「…えいつ」

アリンはユイが俺に抱きついてるのを見て真似してきた

「アリンもかよ」

と俺はアリンに言った。その後

「だんな様、嬉しい?」

アリンは俺にそう聞いてきたので

「嬉しくないこともないが…」

「素直じゃないのね。だんな様」

「ほっとけ、それが俺だ。それよりここにも体育の授業があるとはな…」

と俺はアリンにそう言ってから続けて

「それよりリリースのやつは真面目だな。まあ先生だからだとは思うが…」

と俺はリリースの方を見ながらそう言った。俺がそう言った後アリンはグラランドの方に行つたがユイは俺から離れて

「むっ〜」

と頬を膨らませてそう言っていた。その仕草にちよつと可愛いと思つてしまった。それはさておき

「ん？どうしたユイ？」

俺はユイが少し機嫌が悪そうだったのでどうしたのかを聞いた

「お兄ちゃん、さつきからリリース先生のことジツと見てるから…」

とユイは俺の質問に俯きながら、そう答えた

「そんな見てたか俺？」

「うん…」

とさつきより小さな声でユイはそう言った

「まあ、その…なんだ。ユイのこともちゃんと見てるから、そう落ち込むな」

と落ち込んでいるユイに俺はそう声をかけた

「ほんと？」

ユイは俺の方を見てそう聞いた

「ああ、だから元氣出してくれ」

「そう言っつてユイの頭を撫でた

「うん!!?」

「そう言っつて今度は正面から俺に抱きついた

「お、おい。こんなとこ誰かに見られたら…」

「俺がそう言っつた後、後ろから変な視線を感じたので振り返ると

「……」

「ミラが無言で俺の方を睨んでいた

「あ……」

「…アキオ、この不浄なゴミを消しとばしてください」

「と俺と目が合った瞬間、そう言っつた

「よしきた大将っ!!?」

「とアキオはそう言っつて攻撃する準備をし始めた

「ちよつと待っつてくれ!!?」

「俺はそう言っつて、アキオを止めにかかった。すると

「あれ? 皆さん集まっつて何をしているんですか?」

「リリスが俺達の方に来てそう聞いた

「いや、アキオ達が俺を消しとばそうとしてたんだよ」

と俺はリリスに言った

「あつはつは!!？」

「笑い事じゃないんだが…」

「それより、私の名前を知っているとはな」

とアキオは俺にそう言った

「前にレヴィに教えてもらったからな。つとアキオは俺の名前は知らないんだったな。俺は比企谷八幡だ。好きなように呼んでもらって構わない」

と俺はアキオにそう言った

「じゃあ八幡って呼ばせてもらおうぜ」

「ああ、これからよろしく頼むわ」

俺とアキオはそう言つて握手を交わした。そして、一方では

「ユイさん」

「んにゃ？」

「この前はなんとかになりましたがあなたとそこの男は依然として危険な存在であることは確かです。また何かあれば、王立図書館検閲官（グリモワールセキュリティ）の名において処分しますので、心してください。いいですね!!？」

「はーい」

とミラとユイはそう会話していた。セリナはというと

「なんとということでしょうか…魔道士の頂点であるトリニティセブンの面々が一堂に集結…」

「こ…これは…トリニティセブンによる八幡さん争奪戦が始まるのでは!!?」

と興奮気味にそう言っていた

「そんなんあるわけないだろ…」

「八幡の言う通りです。もう…一体、何を言ってるんだか…」

リリスも俺の後にそう言ったが

「…なるほど、ここで決着をつけるのもいいっすね…」

「えっ!!?」

「そうだな!!?この前は途中で邪魔が入っちゃまったからなっ!!?」

レヴィとアキオはそんなことを言っていた

「ちよ…えっ」

リリスはレヴィとアキオの会話を聞いて動揺していた

「嫉妬」（インウィディア）の書庫（アーカイブ）に接続…テーマを実行するっす!!?

神風招来」

「暴食」（グラ）の書庫（アーカイブ）に接続…テーマを実行するぜ!!?」

レヴィとアキオはこの前の勝負の続きをしようとメイガスモードになった

「私も…本妻の意地を見せないと…!」

となぜかアリンもそう言って参戦しようとしていた

「えっ!? あっ…アリンさん!?」

リリースもそう言って驚いている

”憤怒”（イラ）の書庫（アーカイブ）に接続…テーマを実行するわ」

とアリンは言ってメイガスモードになった

「アキオ!!? 遊んでる場合では…」

ミラはそう言いアキオを止めようとした

「皆さんも!? 勝手に魔術をこんなところで…」

リリースもミラの後にそう言っていた

「すごいですっ!!? レヴィさんの忍法術（シャーマニック・スペル）、アキオさんの真言

術（マントラ・エンチャント）、アリンさんの聖儀術（カオシック・ルーン）!!?」

「こんな凄いのが同時に見られるなんて、超大スクープです!!?」カシャ

とセリナはそう言ってトリニティセブンのメイガスモード姿を見て興奮しカメラで

その様子を撮っていた

「ふふ…お兄ちゃん争奪戦と聞いたら黙ってられないねっ。”強欲”（アワリティア）の

書庫（アーカイブ）に接続：テーマを実行するよん！」

ユイもセリナの発言の後にメイガスモードになった

「出ました!!? 学園でも誰も見たことのなかったユイさんのメイガスモード!!? しかもユイさんの「重唱術」（アーク・シンフォニー）も見ることができると!!?」

セリナはユイのメイガスモードを見てさらに興奮し、そう言った

「そんなに凄いのか? ユイの魔術は」

俺はリリースに聞いた

「はい。ユイさんの魔力は枢機クラスですからこんな所で発動したら…」

とリリースが答えている時に

「「星降る夜の小夜曲」（スターリーナイト・セレナーデ）!!? みんなでユイの世界にご招待だよ!!?」

ユイがそう言って魔術を発動させた。そして大きな光を放った

「ん?なんだ…眩しい」

と俺は眩しさのあまり目を瞑り、そう眩いていた。そして光が消え目を開けると

「…(´▽`)はっ」

「いらっしやい、お兄ちゃん。ようこそユイの世界へ」

ユイはそう言った。どうやら俺は、またユイの夢世界に来たらしい

「ああ、夢の中のユイか」

と俺はユイにそう言った

「そうっ、夢の中のユイだよ。お兄ちゃんはこっちの方が好き？」

とユイは俺に聞いてきたので

「俺は好きか嫌いかは言わない主義なんだ。まあでも夢の中のユイもいいとは思うぞ」

「お兄ちゃんにそう言ってもらえると嬉しいな」

「それは良かった。でリリス達は？」

俺がそう言った後、リリス達がどこにいるかをユイに聞いた

「ちよつと別の夢を見てもらってるの。ほらっ」

ユイはそう言いリリス達の方を見た。俺もユイの視線の先を見て

「本当だ。みんな気持ちよく寝てるな…」

と俺が辺りを見渡しながら言っている

「全くどういいうつもりですか!!？」

とミラが強い口調でそう言っていた

「あれ？なんでミラは寝てないんだ？」

俺はミラが寝ていないのを疑問に思い、ミラに聞いた

「私は直前で私の映晶術（ゲヘナ・スコープ）で術を反射させて防ぎましたから」

とミラは俺の質問にそう答える

「ミラちゃんは、ほとんどの術を反射させることができるんだよ！」

ユイがミラの後にそう言った

「へえ、凄いな」

と俺が呟いた後

「私はここに長居するわけにはいきませんから。それでは失礼します」

ミラはそう言っただけで消えていった

「消えた。つてことは起きてるのは俺とユイだけか…」

「そうだね。起きてるのはユイとお兄ちゃんの2人だけだよ。だから…」

とユイはそう言っただけで顔を俺の顔へと近づけ、キスしようとしたので

「ダメだぞ」

俺はそう言っただけで、キスする直前で阻止した

「あくんっそんなあーっ!!?」

とユイはそう言っただけで

「いいか。そういうのは本当に好きな人にするもんだぞ」

と俺はユイにそう言った

「ユイはお兄ちゃんのこと本当に好きだよ!!?」

とユイは真剣な顔で言った

「ありがとな。でも今はダメだ。もつとお互いのことを知ってからじゃないとな。まずはそうだな…友達から始めないか？ユイ」

俺はユイにそう言つて、友達から始めようと提案した

「うんっ！わーいっ！！？お兄ちゃんと友達！！？」

ユイはそう言つて、俺と友達になつたのが嬉しいのかはしやいでいた。

「それより早く学園に戻らないか？」

と俺はユイに学園に戻るよう提案した

「そうだね…でもその前に…」 チュッ

と俺は提案に賛成した後、俺の頬にキスをした

「っ！！？」

俺はユイに急にキスをされたので驚いてしまった

「これぐらいはいいよねっ！お兄ちゃん。本当に助けてくれてありがとっ」

「まあこれぐらいはな」

と俺達はそう言つて現実へと戻つた

一方でリリス達は、八幡とユイより先に現実へと戻っていた

「八幡とユイさんはまだ寝ていますね」

俺とユイが保健室で寝ている姿を見て、そう言っていた

「だんな様の寝顔は可愛いわね」

とアリンは俺の寝顔を見てそう言っていた

「そうっスね。リリス先生とセリナさんもそう思うっスよね？」

「そうですね。いつもの八幡ではないみたいです…」

「ですねーっ。ユイさんもすごく幸せそうです」

「これで、だんな様が出会ったトリニティセブンは6人目…」

「そうっスね。まあ最後の1人は…」

「行方不明になっている…」チラッ

リリスはそう言って、セリナの方をチラッと見た。

「ですね…でもユイさんを助けることができた八幡さんなら…もしかしたら…」

俺とユイがまだ現実へと戻ってくる間に彼女達はそう会話していたのだった

l t o b e c o n t i n u e d 1

第12話 永劫図書館とクライマー

体育の授業があつた翌日、外は珍しく雨だつた

「久しぶりの雨だが、結構降つてるな…」

俺は制服に着替えながらそう呟く。すると

「八幡、ちよつといいですか？」

リリスはノックをして俺にそう聞いた

「リリスか、俺になんか用か？」

「実はちよつとした事件が学園内で発生しまして…」

「こんな朝早くにか？」

「はい」

「で、その現場に来てほしいって事か？」

「はい。その通りです」

「じゃあ、行くか」

そして、俺とリリスは事件現場へと向かった。そして、事件現場に着くとガラスが散乱し酷い状況だつた。

「ここが現場か。ガラスなどが散乱してるな…」

「どうやら昨晚に何かあったみたいなんです」

「何か…?」

「はい、おそらくは…」

リリスがそう言いかけた時に

「崩壊現象の痕跡を感じます」

ミラがこちらに来て、そう言った。そして、俺の方を睨む。

「な…なんだよ」

「え、えつとです…。崩壊現象の痕跡から今、1番犯人と疑われているのが八幡とユ

イさんです…」

「ふーん」

俺が、そう頷いていると

「ほんとだ。凄い魔力残滓だね」ヒヨイ

ユイが俺の背中から顔を覗かせた。

「ちよつ…ちよつとユイさんっ!!?八幡と顔が近いですよ!!?」

「ん?そうかな?」

「そうですっ!!?」

「むふふ…」 チュッ

そう言つて、ユイは俺の頬にキスをした。めっちゃ恥ずかしい

「な…?!?…女の子が公衆の面前でキッキキキツ…」

リリースは顔を赤くしていた。やはりこういう光景に慣れていないらしい

「にやはは…リリース先生は可愛いにや…」

「ユイ、その辺にしといてくれ。また、後々面倒なことになるから」

「はーい」

「そうだ、ユイ。ここで、崩壊現象の気配があつたらしいぞ。またなんかやったのか?」

「お兄ちゃん、ひどーい。ユイじゃないよ!だってユイの魔力が暴走してこの学園がダ

ンジョン化してるはずだもん!」

「ふむ…俺の魔力が暴走して黒い太陽が現れるみたいなやつか」

「そうそうっ!!?」

「残念ですが、確かにこの魔力は貴方達のものではないようです。とても残念ですが」

「残念なのかよ」

「そんなことより、リリースさん」

「そんなことで済まされちゃったよ…」

「はい。なんでしよう?」

「今回の魔力……あの図書館」と同じ気配を感じます」

「あの図書館……!? ……そうですか。やはり……」

「……」

☆☆☆

俺はあの後、教室に戻った

「おい。アリン」

「だんな様が私を呼ぶなんて珍しいわね」

「そうっスね」

「ちよつと聞きたいことがあってな。レヴィ達も聞いてくれないか」

「いいわよ。だんな様」

「自分もいっスよ」

「図書館についてなんだが、なんか知らないか？」

「図書館？」

「ああ、なんかミラとリリスがシリアスそうにそう言ってたから、気になってな……」

「図書館か……。よくわからないなあ」

「……ユイは眠ってたから知らないのも無理ないと思う」

「そっかあ」

「そのことなら知ってるっすよ。…お化けが出たんっすよ」

「ひゃわっ!!?」

「ユイはお化けが苦手みたいだな」

「あれ?八幡さんはお化けとか平気っすか?」

「ん?ああ…魔物とかこの前みたいなのドラゴンと似たようなもんだし俺は平気だ」

「それは、ち…違うよっ!!?魔物は可愛いけどゆーれいは怖いもん!!?」

「そ、そうか…。でも、幽霊でもなんでも襲われないんなら問題ないんじゃないのか?」

「ところが、実は被害が出ているっすよ」

「幽霊事件でか?」

「…そう。あの日も昨日みたいに強い雨の日だったわ…」

そう言つて、アリンが話してくれた。短くまとめると、双子の姉妹が図書館で居残り研究をしていて、その時に事件が起きて雷と同時に図書館中の窓ガラスが割れて、本棚も倒れてきたりなんかして気がついてみれば姉妹の姉だけがいなくなっていたということだった

「それで、今も行方不明ってことか」

「そうっす。八幡さんがこの学園に来る半年ぐらい前から行方不明っすね」

「それで、どの辺が幽霊なんだ?」

「今でも、時折こんな雨の日にはいなくなつた少女の人影が目撃されるとか……」
「ふええーっ」

「なるほど……じゃあ、調査してみるか。気味が悪いしな」

「そうっスね」

そして、俺達は調査をすることにした

☆☆☆

「とういわけで、図書館に来たわけだが……」

「あれ……八幡？」

「リリスか。幽霊事件について気になつたから、ちよつと調べに来た」

「邪魔をしに来たなら即刻、消し飛んでもらいますよ？」

ミラは相変わらず俺に対して冷たい

「邪魔をしに来たわけじゃねーよ。それに、この事件に崩壊現象らしき魔力があつたなら俺がいた方がいいかもしれないだろ」

「ああ……!!?なるほど、八幡は2度も崩壊現象を消していますしね」

「そういうことだ。……くん？」

「セリナ、どうかしたのか？」

「あ、八幡さん……」

「どうしたんだ？ 元気が無いみたいだが…」

「その…実はですね…」 ドォーン

「な、なんだ？！」

「きやわ？！」

大きな音がした後に、俺らはなぜか図書館とは違う別の場所にいた

「俺は確か、図書館にいたはずだが…」

「ここは、”永劫図書館”」

「そんなつ…あの図書館に強制接続させられたとでもいうのですか？！」

「ふわぁーあ。ちよつと寝てる間に面白くなってるじゃねーか。お前らは固まって端にいた方がいいぞ」

「わかった。…つて、なんだこの黒い物体は」

「八幡！」

そうリリスが俺に叫んだ後に、俺はセリナに押されて壁まで飛ばされた

「痛つてー。なんだよセリナいきなり…危ないだろ」

俺はそう言つて、立ち上がつて前を見た。すると知らない女の子が正面に立っていた

「アンタが魔王候補？」

「は？ 誰だこいつ？」

「リーゼさん…」

「は？リーゼ？」

「そんな…貴方…なぜ…」

「センセにセンパイ、久しぶり。そのついでに…魔力を貰っていくわよ」スツ

そう言つて、リーゼという女の子はリリスとミラの間において魔力を奪う態勢になつていた

「!!」

「いただき」ズシヤツ

そう言つて、リーゼという女の子が魔力を奪おうとしていたが

「おおーつと!!？」

「まだこつちにも、あいさつが来てないっスよ」

アキオとレヴィが止めに入った

「アキオにニンジャじゃないっ！元氣にしてたみたいね」

「まあな。そつちはなかなか悪の魔道士っぽくなつたじゃねーか」

そうアキオ達が話をしてる一方で、セリナは俺の方に来ていた

「八幡さん！大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。それよりこれはどうということだ？」

そう言つて、俺はリリス達の方を見た

「はい…あの人は私の双子の姉です」

「双子の姉。まさか、さっきの幽霊の話で行方不明になった姉がコイツつてことか…」
俺がそう呟くと

「幽霊?…ふーん。なるほどね…あたしの実験はそういうコトになったんだ」

そうセリナの双子の姉であるリーゼが言った

「実験?」

「はい。彼女は…禁忌とされていた”永劫図書館”への接続実験を強行した罪人で…」

「元王立図書館検閲官次席…」

”怠惰”（アケディア）のトリニティセブン、リーゼロットⅡシャルロックです」

俺がそう聞くと、リリスとミラとセリナがそう答える。

「コイツが、最後のトリニティセブンか…」

「まさか、全員揃つた上に魔王候補までいるなんて。せつかくだから皆の魔力をあたしが全部もらつてあげるわね」

「そんな事、俺がさせないし許さない」

俺はそう低い声でいい、リーゼの正面に立った

l
t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
l

第13話 リーゼロツテⅡシヤルロツク

「へえ。魔王候補くんが、あたしに何かするの？」

「お前の行動次第だな」

「ふーん。そう…」

「お姉ちゃん!!? どうしてこんな…」

「どうしてつて…悪の魔道士っぽくて

かっこいいでしょ?」

「何故、我々の元を去り禁忌を犯したのですか？」

「あー…それはほら…私、魔道士だから魔導の研究のためよ」ピツ

そう言つてリーゼはタブレットのようなものを操作し、続けて

「王立図書館検閲官（グリモワールセキュリティ）になったのだから、崩壊現象をいっばい経験できるからだしね…」シユツ

そう言つて、リーゼは姿を消す。

「消えた…」

「あぶないっ!!?」

「うおっ!!?」

そして、リーゼは俺の方に向かって何かしようとしていたがセリナに助けてもらい、なんとか防げた。

「お…バレちゃった」

「私だって数秘術（ロゴス・アート）の使い手です!!? お姉ちゃんの出現ポイントぐらい算出できるんですから!!?」

「…さすが、私の愛しい双子の妹!!? ちゃんとして研究して魔力も高めてるのね…」

リーゼは低い口調でセリナにそう言っていた。

「ゾクッ

セリナはリーゼの言葉に肩を震わせていた。

「ちよつと、オイタが過ぎないかい?」ゴツ

そう言つてアキオは、リーゼに蹴りをいれたが防がれてしまう。

「何!!?」

「あぶないじゃない… アキオは相変わらず、バトルマニアね」

「そういう研究テーマなんでね」

「今回は加勢するツスよ」

「…私も教え子の不良化は止めないといけませんつ!!?」

「うーん…さすがにアキオにニンジャさらにセンスまで相手にするには分が悪いわね…」

「だったら、とつとと引きあげてくれないか」

「それはできない相談ね」

「そうか…つと、その前に、お前に聞きたいことがあるんだがいいか？」

「どうぞ。魔王候補くん」

「お前は、こいつらから離れて悪の魔道士サイドにいった。つまり、お前は敵つてことでいいんだな？」

「そうよ」

「そうか…ならお前をここで倒さないといけないな」

「八幡!!? 本気ですか!?!」

リリスは俺の言ったことに過剰に反応し、そう言った。

「当たり前だ。元は仲間だったとしても今は敵だ。野放しにしておくわけにはいかな
い」

「それはそうですが…」

「と言つても、俺だけの判断では決めれない」

「セリナ!!?」

俺はそう言っつてセリナの名を呼んだ。

「はい！」

「お前がどうしたいか決めろ」

「それはどうということですか？」

「あの姉を倒すか姉の考えを改めさせて、こつちに戻つてきてもらうかをセリナに聞いてるんだ」

「私はまたお姉ちゃんと一緒にいたい…こつちに戻つてきてほしいです!!？」

「そうか…じゃあ、セリナ。あとは俺に任せてくれ」

「はい！」

「というわけで、お前らは極力手を出すなよ」

「それはあなたが1人でやるということですか？」

「まあ、そういうことだ」

「そうですか…ではあなたの力を見せてもらいますから」

「やけに素直だな…明日は嵐が来そうだ」

「消し飛ばしますよ？」

「それは勘弁だ」

「まあまあ、大将落ち着けつて。それと八幡、頑張れよ」

「八幡さん。頑張ってくださいッス」

「だんな様、がんばって」

「お兄ちゃん、頑張ってね!!？」

「ああ、頑張ってくるわ」

俺はユイ達の応援を受け、リーゼのそこに向かった。

しかし、その途中にリリスと目が合い

「八幡…生きて帰ってきてくださいね…」

リリスは心配そうに俺に言った。

「当たり前だ。ここで死ぬわけにはいかないからな」

「だから心配しなくていい。リリスは近くで見守ってくれ。俺は勝ってくるから」ポン

俺はリリスの頭に手を置き、心配させないようにそう言った。

「っ!!?!…はい！」

リリスは俺の言葉を聞いて笑顔で、そう言った。

「待たせたな…。それじゃあ、いくぞ」

「私を楽しませてちょうだいね、魔王候補くん」

そして俺とリーゼのバトルが開始された。

l
t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
|

第14話 バトルのゆくえ

「ハアハア」

リーゼとのバトルが開始して、15分ほどたった。状況は俺の方が押されている。

「ふふっ。魔王候補クンも大したことないわね」

「……………」

なぜ押されているかというところ。バトル開始直後に遡る。簡単に説明すると……

俺がメイガスモードになる↓それを見たリーゼが戦力を高めるために魔力を妹のセリナの首から奪い魔力をUP↓そして、バトルがスタート↓俺が押され劣勢に立たせている。

……………とまあ、こんな感じである。

啖呵切つてこのザマとはなんとも不甲斐ない。やはり俺の力不足なのだろう。何とか、劣勢から優勢に持つていきたいが中々、突破口が見つからない。どうしたもんか……「人の魔力奪つてんだから、お前の方が強いのは当たり前だろ」

「それもそうね」

「それよりも、なんで妹の魔力を奪ってまで魔王候補？になりたんだよ」

「そりゃあ、魔道士だもん。魔道士の究極の悲願である魔王の候補者になりたいと思うのは当たり前じゃない？」

「そういうもんか？」

「魔王候補くんもすぐ魔王になってみたいと思わないの？」

「まあ、なつたみたいとは思いますが……すぐにはなりたいとは思わない。力をつけてからなるもんだろ」

「八幡の言う通りです。研究と研鑽を重ねてのち到達するものですよ」

「嫌よ、そんなの。私は一足飛びでいきたいの！過程をすつ飛ばして結果に辿り着く、それが私のテーマでもあるし」

「そんな付け焼き刃で魔王になれるとは思われないがな。たとえ魔王になったとしても一日天下で終わるぞ。力が伴っていないければな」

「……言ってくれるじゃない」

「それに、妹を犠牲にしてる奴を魔王にするわけにはいかない。それにセリナにもお前を改心させてこちら側に戻らせるって約束したしな」

「……魔王候補くんをこちら側に引き抜こうと思っただけど無理そうね」

「そんなのは、こつちから願ひ下げだ」

「そつか。こちら側に来てくれるなら魔王候補くんの妹の小町ちゃんの情報をおげようと思つてたのになあ…。」

「なんだと？何でお前が小町のことを知つてる？」

「知りたいならこちら側に来ることね、比企谷八幡くん」

そう言つて、リーゼは俺の目の前にやつてきた。俺は一步下がる。

「今です、アキオ。彼ごとやりなさい」

「了解」

「レヴィさん、お願いします。出来れば八幡には攻撃しないように」

「分かつてるつスよ」

手を出すなど言つておいたのにな。まあ、あいつらが俺の言うことを守ると思つてはいなかつたので、こうなるとは予想していた。

アキオとレヴィはリーゼに向かって攻撃を仕掛ける。しかし…

「っ!!」

「効かないわよ。そんな攻撃」

リーゼは自分の魔力を纏つた闇の翼で攻撃を躲す。

「レヴィさん！」

「アキオ、大丈夫ですか？」

「大丈夫っス」

「なんとかな…」

レヴィとアキオはリーゼとの距離を取る。

「さーて。魔王候補くんの魔力を頂こうかしら」

「何する気だ？」

「いただきます」

リーゼは俺の問いに答えることなく、俺の唇を奪ってきた。

「！！！！」

「お兄ちゃん、俺は私のものなのに！ユイもお兄ちゃんとキスしたい！」

「ユイさん、今はそんな事言ってる場合ではありませんよ」

「んっ…」

「……………」（すごい変な感じがする。力が徐々に抜けていく感じだ…）

それよりも、舌を絡ませるのはやめていたいただきたい。力がより一層抜けるから…

「んっ… こんなに強い魔力チカラ、初めて…」ビクビク

リーゼは俺から離れる。

「くっ、やはり俺の魔力を奪ったのか」

「ご名答よ、魔王候補くん」

「くっ…」

「大丈夫ですか、八幡」

「やばい、魔力が吸い取られて力が出ない」

脱力感が凄い。立ち上がるのもやっとの状況だ。

「ありがとね。男の子とはファーストキスだったけど、堪能させてもらったわ」

「リーゼちゃん、ズルイ！ ユイもしたい！」

「ユイさん、落ち着くっス」

「だってえ！」

「こりや、ヤバイな。マスターの魔力はほぼゼロに近いな」

魔道書は俺の身体を確認し、そう呟く。

「せっかく、魔王候補くんの魔力を奪ったことだし…：ちよつと試しに魔力を使ってみようかしら」パチン

「!?!」

そう言つて、リーゼは指を鳴らした。すると、女性陣の服がはだけた。変な魔力の使い方をするなあ。もっと、いい使い方があろうに…：…

「オイタが過ぎますよ、リーゼ」

「やっぱり、先輩は跳ね返したみたいね」

「自分もいるっすよ」

「ニンジャまで、跳ね返すとは…さすが魔道士最高のトリックスターの異名は伊達じゃないのね」

「せっかくだから、本気を出すっすよ」

「首席検閲官の名にかけてリーゼロツテⅡシャルロックを排除します」

「いいわ。相手をしてあげる」

「やっぱり、レヴィ達の力を借りないといけないのか」

「後悔は後です。八幡は安静にしてください。ここはレヴィさん達に任せましょう」

「… そうだな」

俺は自分の弱さを再確認しつつ、レヴィ達の戦いを見守ることにした。

「ミラさん。アキオさんの代わりを自分が務めるっす」

「はい。私は彼女の魔力をスキャンします。その間の時間稼ぎをお願いします」

「了解っす」

レヴィはリーゼにクナイを使い攻撃をするが、リーゼが放つ魔力で無効化される。レヴィはリーゼとの間合いを取り、次の攻撃に備える。

「相変わらず速いわね…」

「リーゼさんも中々凄いつスよ。アレを躲すのはほぼ不可能つスから。それに自分の体に傷をつける人はほとんどいないつスから…」

「本当は束縛しようと思ってただけど、無理そうね。それじゃあ、次の攻撃に行くわよ♪」シユツ

「！」（消えた）

「解析…」スッ

レヴィの左腕に魔術が展開され束縛される。

「本当にリーゼさんは弱点を突いて攻撃してくるつスね。いやらしいつス」

「褒め言葉として受け取っておくわね」

「でも、これぐらいならなんとかなりそうつス」グッ

レヴィは空中を飛び、左腕に施されている魔術、束縛を力づくで解除する。

「ニンジャって凄いわね」

「まあ、リーゼさん程ではないつスよ。自分の力ではリーゼさんには勝てないつスカら」

「そうね」

「でも、ミラさん相手ではどうかは分からないっすけど」

「!？」

「レヴィさん、時間稼ぎありがとうございます。読み取り完了です。怠惰アヒンデイヤの書庫から

停滞スタグナのテーマを抽出」

「なんかやばそうなんだけど…」

「真正正銘、ヤバイっすよ。これで効かないならこちらはお手上げっす」

「私の力でアレを受け止めれるかな？」

「その慢心、正義の担い手たる私に見せたことを後悔しなさい…」 白ホワイトき時 冬ユニバースの世界」

ドッ

ミラの魔術がリーゼに放たれる。

「本当にやばそうね」

そして、魔術が放たれた後…ミラの周りの床は凹んでいた。かなりの威力だったと

思わざるを得ない。

「倒せたっすかね？」

「いいえ、彼女を倒せてないのは明白です」バチッ

ミラはそう言って、水晶を後方から伸びるリーゼの手に触れさせた。

「痛っ！魔王候補くんの魔力が無かったらヤバかったかも……」

「いつも、私の邪魔するのは彼なのですね……忌々しい」

「落ち着くつス。いつものことつスから」

別に俺は悪くないと思うんだが……それよりも、この状況はマズイよな。

「ふう……リーゼは強敵だな」

「はい。リーゼさんは八幡と同様に魔王候補化していますから」

「俺も鍛錬を重ねれば、リーゼ並みに強くなれるって事か？」

「その認識で大丈夫ですよ。八幡も魔力を高めれば強くなります」

「そうか……それよりリリース。魔力ってどんなものなんだ？」

「魔力というのはその人の持つ「存在するための力」です。魔道士は世界の法から逸脱した力を研究したり行使したりします。そして、その存在するための力がないと死を迎えたり、消えたり、暴走したりします」

「ということとは、魔力を奪われたセリナは……」

「そうよ、だんな様。早く回復させないとセリナは死んでしまうか、消えるか、暴走してしまうわ」

「マジか。また俺のせいで……でも、俺もセリナ同様に魔力を奪われたが大丈夫なんだ

が……それはどうしてなんだ？」

「お兄ちゃんが大丈夫なのはね……魔道書のおかげなんだよ」

俺の問いにユイが答える。

「だからマスターは私に感謝しまくってくれていいんだせ？感謝ついでに私は早くここからトンズラすることを提案するぜ」

「それが出来たら苦労はしないで、魔道書。あいつ、かなり強いし」

「当たり前だぜ、マスター。お前さんの力が含まれているからな」

「それでよく、トンズラの案を思いついたな。無理ゲーだろ」

「逃げるというなら私の魔術でこの世界を崩壊させてあげるわ」

「そのリスクは？」

「魔力が不安定だから皆もろとも消えるリスクがあるわ、だんな様」

「その案は却下だ。リスクが大きすぎる。他の案はあるか？」

「もちろんあるぜ！」

「その案は？」

「私が空間をぶち壊すって案だ！」

「はい！お兄ちゃん！」

「ユイも何か案があるのか？」

「ユイの夢の中にご招待する案だよ！」

「一応、そのリスクを聞こうか」

嫌な予感はあるけど…

「空間ごと、ぶち壊われてみんなが助からないリスクがあるぞ！」

「二度と夢から醒めないかもしれない！けど、お兄ちゃんの為だから頑張る！」

「いや、その2つの案も却下だ。リスクがでかい」

「そんなあ！」

ユイは意義を唱えるが、やはり一番安全な方法が好ましい。

「やっぱり、リーゼを倒して逃げるのが手っ取り早いかもな」

「私も八幡の意見に同意です」

「それが一番かもな！」

リリスの後にアキオを同意する。やはり打倒リーゼになりそうだ。

「ふうーん。魔王候補くんは逃げちゃうんだ？」

「この状況を見ればな」

「じゃあ、小町ちゃんのごことはどうでもいいって事かな？」

「あ？」

どうでもいいだど？んなわけあるか、俺にとって小町はかけがえのない家族であり妹

だ。助けるに決まっている。

ドクン……

「っ！」（何？この感覚は……）

八幡がそう思うのと同時にこの空間が少し揺れ、八幡の表情が険しくなる。トリニテイセブンの面々はその異常を感知する。一瞬であるが、八幡に対しての恐れが感情が湧いていた。

「どうでもいいいわけないだろ。小町は俺の家族であり、妹だ。今回は戦略的撤退するが、近いうちに必ず小町は俺達の手で助ける」

「私が易々と魔王候補くん達を見逃すと思う？」

「いや、思わない」

「じゃあ、ここは自分の出番っスね」

「レヴィ……」

「八幡さん、ここは自分に任せるっス」

「すまんが、よろしく頼むわ」

俺がそう言うのと、レヴィは高速でリーゼの元に向かい攻撃を仕掛ける。

「残念だけど、止まって見えるわよ。その動き」

「そうっスか？」 シュツ

「き、消えた!?!」

リーゼは魔術を発動し、対応しようとするが後手に回っている。

「後ろっスよ」

「っ！」 バシユツ

レヴィはリーゼの魔力で纏う翼をクナイを使って切った。そしてリーゼは瞬間移動を使い、避けようとするがレヴィも負けじと後を追う。

「瞬間移動について来られるなんて、どんだけチートなのよ！」 ザツ

リーゼはレヴィに向かって攻撃をするがレヴィは変わり身の術を使い攻撃を躲し、リーゼの背後を取る。

「自分はニンジャっスから、これぐらいなことないっスよ」 ザシユツ

そして、リーゼの翼を再度切る。すると、リーゼの翼はだんだんと消えていく。

「それに翼なんて生やしたこと一度もないみたいっスから、動きが前よりかなり鈍ってる感じがしたっス」

「なるほど、翼を纏っている分だけ動きが遅れていると言うわけですね」

「大体合ってるっすよ、ミラさん」

「まさか、さっきの異変で気付かれてたとは……」

「弱点を突く戦法を教えたのは私ですよ、リーゼ。そして貴方の魔力は最高位のものですが、それを使いこなせていないなら三流魔道士と同じですよ」

「あはは……これは私の方が分が悪いわね。私の魔力が落ち着いた頃にまた招待することにするわね。それと、魔王候補くん」

「なんだ？」

「また、魔王候補くんの魔力を奪いに来るからね！」

「それは勘弁してくれ」

「むう……」

「じゃあ、またね！」 スツ

リーゼは俺にそう言い残し、消えた。

そして、リーゼが消えた後……俺達は図書館へと戻っていた。

「戻ってこれたみたいだな……」

「まあ、今回は痛み分けってところっすかね」

「いや、俺の負けだな。今回は運が良かっただけだ」

「そうっすね。八幡さんはこれからどうするっすか？」

「そりや、もちろん。次の戦いに備えて鍛錬を重ねるつもりだ。小町のためにも、セリナのためにも」

「そうっすか。頑張ってくださいっす」

「ああ。それと、今回はありがとな。レヴィのおかげで今回の危機を無事、脱せた」ポン
俺はレヴィの頭に手を乗せ、感謝の意を伝えた。

「どうもっす」（八幡さんの手は温かいっすね）

「それで、早速ですが不浄な魔王候補を次の戦いに備えてアキオと特訓をしたいと思
います。いいですね」

「よし！来た！」

「それは構わないんだが…… とりあえず、ミラは服を着てくれると助かる。目のやり
場がない」

今になってミラの服が破け、ヤバイ状態になっている。

「え？……っ！」バツ

ミラは俺の指摘に気付き、慌てて隠す。

「お兄ちゃん！そんな目でミラちゃんを見ちゃダメ！」

「そんな目ってなんだよ？」

「えっつい目だよ！そんなに見たいならユイのを見て！お兄ちゃんにならいつでも見せ

てあげるから！」

そう言っつて、ユイは服を脱ごうとする。

「バカ、やめろ。リリス、ユイのやつを止めてくれ」

「分かりました。ユイさん、ここで服を脱ぐのはやめてください」

俺とリリスはユイの暴走を止めるのに必死だった。

こうして……波乱続きではあるが、俺はミラとアキオの指導のもと、リーゼとの再戦に向けて特訓を開始することになったのだった。

……
続く